

宝町キャンパス整備事業竣工特集

医学類プロムナード及び附属病院環境整備事業完成式



医学類プロムナード及び附属病院環境整備事業完成式

日時 平成二十八年七月二日(土) 十一時三十分～十二時三十分
場所 金沢大学医薬保健学域医学類正門、金沢大学附属病院正門

完成式次第

医学類プロムナード完成式 十一時三十分～十一時四十二分(医学類正門)

医学類長式辞 多久和 陽 医学類長

学長挨拶 山崎 光悦 学長

来賓祝辞 馳 浩 文部科学大臣

来賓祝辞 中村 信一 金沢大学医学部十全同窓会 会長

医学類門柱除幕 十一時四十二分～十一時四十七分(医学類正門)

プロムナード前テープカット 十一時四十七分～十一時五十二分(プロムナード)

附属病院環境整備事業完成式 十二時～十二時九分(附属病院正門)

病院長式辞 蒲田 敏文 病院長

来賓祝辞 谷本 正憲 石川県知事

来賓祝辞 山野 之義 金沢市長

附属病院門柱除幕 十二時九分～十二時十四分(附属病院正門)

附属病院門柱テープカット 十二時十四分～十二時十九分(プロムナード)

周辺視察 十二時十九分～十二時三十分(附属病院、医学類)

医学類・附属病院・十全医学会合同懇親会

日時 平成二十八年七月二日(土) 十二時四十五分～十三時四十五分

場所 医学類教育棟大多目的室

次第

開会の挨拶 山本 博 理事(国際・附属病院・同窓会担当)・副学長

寄附への感謝状授与 山崎 光悦 学長

乾杯 中村 信一 十全同窓会会長

締め 金子 周一 医薬保健学域長

医学類プロムナード完成式

式 辞



本日、宝町キャンパス・メインプロムナード完成を祝う記念式典を迎えるに当たり、金沢大学医学類を代表して、ご挨拶を申し上げます。

宝町キャンパスにおきましては、再開発整備事業として平成十三年に附属病院入院棟が竣工したのを皮切りに、平成十九年には医学類教育棟と基礎研究棟の全面改修が成り、さらに一昨年に臨床研究棟が竣工いたしました。そしてこの度のメインプロムナードの完成をもちまして、宝町キャンパスの整備事業が完了し、教育、研究、診療の施設・環境が一新されました。さらに、この事業に併せて、金沢市におかれましては、キャンパスと市道の境界沿いに心安らぐ遊歩道の整備をご計画いただき、こちらも工事は順調に進捗しており、完成を心待ちにしております。

メインプロムナードの整備事業は、このキャンパスの奥にございます医学部記念館の改修と合わせて、平成二十四年に迎えた金沢大学医学部創立百五十周年の記念事業として計画され、国からの施設整備費、皆様から賜りました百五十周年記念の募金および医学部同窓会からのご寄附によつて、ここに完成を見ました。これもひとえに文部科学省、十全同窓会をはじめ、皆様のお力添えの賜物と、篤く感謝申し上げます。

施設・環境が一新されたこの新しい医学類キャンパスにおいて、諸先輩の築かれた伝統の上に、日本、そして世界を先導する二十一世紀の医学・医療を創造することが私たちの使命であります。また、私ども教職員は、これからの医療、医学研究、行政の各方面におけるリーダーとして活躍する人材の豊かな育成に、これまで以上に真摯に熱意を持って取り組んでまいります。

今後、変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

平成二十八年七月二日

金沢大学医学類長 多久和 陽

祝 辞



本日ここに、金沢大学医学類プロムナード及び附属病院環境整備事業の完成式を挙行するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

宝町地区の再開発整備は、今から遡ること十八年前に始まりました。新病棟の第一期（東病棟）が平成十二年度に、第二期（西病棟）が平成十三年度に完成し、その後、平成十六年度には新中央診療棟が、平成二十年度には新外来診療棟が完成しました。平成二十四年度には医学図書館が、平成二十五年度には医学類C棟が完成し、このたび、屋外環境整備が終わったことで、宝町地区の再開発事業が無事完了いたしました。整備にあたっては、十全同窓会から多額のご寄附をいただき、ありがとうございます。

本日、ご多忙の中お越しくいただきました馳文部科学大臣、地域で大学の教育・研究・診療活動を支えてくださっている石川県・金沢市の皆様、宝町キャンパスに隣接しながら、親身に見守ってくださる町会の皆様、名誉教授の皆様、そして十全同窓会の皆様、そうした多くの皆様のご支援・ご尽力に深く感謝を申し上げます。

金沢大学は世界に伍するトップクラスの大学を目指して、卓越した教育、研究を実践していくとともに、その成果を広く社会に還元して参ります。金沢に在る大学として、世の中のために我々は何ができるのかを考え続けます。医薬保健学域、医薬保健学総合研究科、今年四月に発足した先進予防医学研究科、そして金沢大学附属病院において、今後も最先端の医学研究を進めながら、それに裏打ちされた先進の医学教育、地域及び世界の第一線で活躍できる医療人・研究者の育成、そして最高の医療の提供を、教職員一丸となって目指して参ります。今後とも皆様方にご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

平成二十八年七月二日

金沢大学長 山崎 光悦

祝 辞



本日はお招き頂き、誠にありがとうございます。医学部十全同窓会を代表し、一言お祝いを申し上げます。

医学部創立百五十周年記念事業の掉尾を飾る「医学類プロムナード」の完成、誠にめでとうございます。医学類プロムナード及び附属病院環境整備事業の完成をもちまして、長年の懸案でありました宝町鶴間地区再開発整備事業の完了をみましたのも、文部科学省をはじめとする関係諸方面の皆様方のご理解・ご支援・ご協力の賜物と、心からの御礼を申し上げます。本事業に聊かの寄与をさせていただきました十全同窓会といたしましても、めでたく竣工を迎えられましたことは、大きなよろこびであります。

正門から真つすぐ十全講堂に向かって伸びるメインプロムナードとその周辺には、医学部そして同窓会の様々な歴史が刻み込まれております。十全講堂は昭和三十七年、医学部が創立百周年を迎えた年に、同窓会や県・市からの多大の支援の下、医学部創立百周年記念事業として竣工いたしました。正門を入つてすぐ右手に立つ「若き医師達の群像」は平成二十四年、医学部創立百五十周年記念事業として設置され、また、プロムナード両脇の櫟並木は昭和六十年、医学部卒業生のご篤志により整備されました。本日こうして青々として繁る櫟並木を横に、プロムナードを歩む時、先人達の医学部・医学類に対する熱い情熱をひしひしと感じ、感無量でございます。

平成二十八年七月二日

金沢大学医学部十全同窓会 会長 中村 信一





医学類フロムナード完成式 附属病院架橋整備事業完成式

平成二十八年七月二日(土)、医学類

フロムナード完成式が十一時三十分から、若き医学徒の碑を望む医学類正門で特設のテントを設置して挙行された。多久和陽医学類長の式辞の後、山崎光悦学長の挨拶があり、参議院選挙の最中にも関わらず馳せ参じていただいた馳浩文部科学大臣から祝辞を頂戴した。この後、竹中博康副知事、細田大造副市長、中村信一金沢大学医学部十全同窓会長、山本博理事、金子周一医薬保健学域長、堀修医薬保健学総合研究科長、中村裕之先進予防医学研究科長も加わり医学類門柱除幕をおこなった。

この後、部分的に完成された遊歩道を通り、附属病院正面に会場を移して、附属病院架橋整備事業完成式をおこなった。蒲田敏文病院長の式辞の後、山崎光悦学長、上田博石川県医師会副会長、安田健二金沢市医師会長、山本博理事、蒲田敏文病院長による附属病院門柱テープカットがおこなわれた。完成した病院正門の門扉は格調高く、石引の広見から望む病院はロココ調の赤坂迎賓館のごとき優美さである。

この日、梅雨の合間の晴天といった天気から、うなぎのぼりの気温の上昇を示し、正午過ぎには三十七度に達し、全国一を記録した。十二時四十五分、無事式典は終了し参加者は猛暑を避け、医学類教育棟大多目的室へ移動し、医学類・附属病院・十全同窓会合同懇親会が催さ

れた。

懇親会に先立ち、山崎光悦学長から中村信一十全同窓会会長に今回の医学類フロムナード建設への寄附に対する感謝状が授与された。懇親会には学類・附属病院関係者や、十全同窓会員のみで無く、長期の工事でご不便をおかけした地元の方々がたも参加して、旧医学部、病院の回顧談に花がさいた。最後に、工事の完成を祝い、小立野地区の発展を期して散会となった。

後日談になりますが、このあとフロムナード建設に伴う医学系キャンパスの駐車場不足が問題となりましたが、将来、病院に第二立体駐車場を建設することで一応の着着となりました。宴が終わり、今、晩秋のフロムナードに立つと、櫻の落ち葉が風に舞い「秋の日のヴィヨンの音」こそは聞こえてきませんが、落ち着いたムードを醸し出してくれそうです。医学部と病院の間の、ほんの数メートルではありますが入院患者様に安らぎを与え、学生、スタッフに新たな創造のヒントを与えてくれる空間になっていると思います。次の検証は冬の大雪の後に待っています。

十全同窓会理事長

大井 章史 (昭和五十四年卒業)

宝町キャンパス整備事業竣工によせて

元十全同窓会会長

松原 藤継 (昭和二十四年卒業)

私は平成七年から十一年にかけ四年間、十全同窓会会長、それ以前の教授時代の昭和六十三年から平成二年にかけ二年間、同理事長をさせていただきました。宝町キャンパス整備事業がスタートしたのは平成九年であり、私の同窓会長の時ですが、私自身は特に努力した記憶はありません。

今回の整備事業より以前のことですが、理事長時代の昭和六十三年から平成二年にかけての二年間、同窓会員の皆様に多大のご協力ご支援をいただきましたので、心からの感謝を込めて報告させていただきます。それは、十全講堂の空調(冬期寒くて講堂を使えない)の改良と、記念館の床(土足のままで入れない)の改修の費用(計数千万円)を文部省が予算化してくれない(同窓会員の寄附による建物の故か)ので、同窓会員に寄附をお願いせざるを得なくなりました。医学部教授会で検討し、医学部学術振興基金(目標額一億円)とし寄附をお願いし、その一部を上記の改良、改修に充てることになりました。

募金を順調に進めるには如何にすべきかは、理事長の私が考えねばなりません。以下のことを考え実行しました。先ず昭和六十三年九月、当時ありました年一回の北陸医学会総会が福井医科大学(福井大学医学部の前身)で開催された

ので、総会長をなさる十全同窓会会長でもある梶川欽一郎福井医科大学学長にお話をし、同学会評議員会(殆ど金沢大学医学部出身)で、総会長から今回の募金について協力をお願いしていただきました。本学医学部内は、各教室、各診療科医局長から同門会の先生方に働きかけていただくのがよいと考え、募金のために雇用した事務員に募金関連書類を台車に積んで運ばせ、私が各医局長を訪ねお願いしました。金沢市内及び近郊の関連病院へは、私が直接病院長をお訪ねし、院内の同窓会員の医師に協力するようお願いいただきました。各地の同窓会支部長にお願ひし支部の先生方にお勧めいただき、支部会が開催される時は出席させていただき直接お願いしました。

かくして、二年以内に目標額を超える一億七百万円のご寄附をいただきました。うち、数千万円は十全講堂の空調の改良と記念館の床の改修に当て、大半は医学部の学術振興のためとし、教授会で優秀な研究をした若手の研究者を選び、表彰と奨学研究費の授与等を行いました。

改めて、ご協力ご支援いただきました同窓会員の皆様に心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

金沢大学病院新改築の回顧

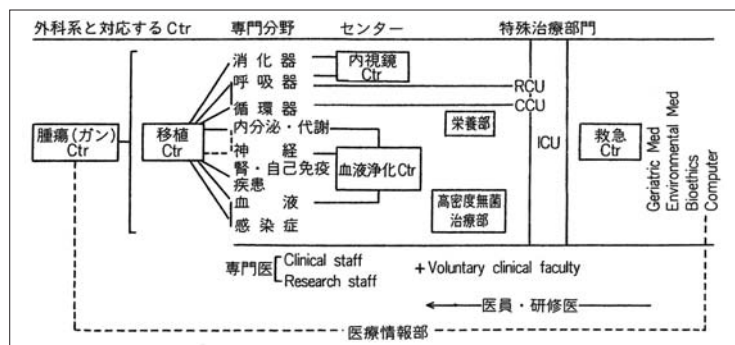
―病院長時代のメモから―

元十全同窓会会長

竹田 亮祐 (昭和二十七年卒業)

金沢大学附属病院は戦前(昭和九年)、十年一月左半分・大里内科―竣工、昭和十三年一月右半分、石川外科―竣工)当時としてはモダンな六階建ての鉄筋コンクリート建築の、いわゆる旧館(第六病棟)、その後方には精神科病棟、前方には老朽化した木造の各診療科が狭隘な廊下で連結されていた。昭和二十九・三十一年にかけて第三病棟、次いで昭和三十四年に中央診療棟が完成した後、検査部、放射線部、手術部が、さらに四十七年には外来診療棟および管理部門が完成したが、急速な医療技術の進歩、患者第一主義、P F Mなど、診療部門の在り方、救急部、画像診断部門、I C Uの設置場所、また医学研究部門との利便性を配慮した合理的な近代的大学病院の将来を謀る将来計画検討委員会の必要性が求められ、わたしの前任・野村進病院長時代に開催されていたが、わたしのメモ、牧野育造事務部長の科長会議録によれば、昭和五十九年六月十五日の附属病院科長会において夏までに将来計画検討委員会の開催が申し合わされ、七月二十五日に発足、以降何度か同委員会は催された。しかし、当時予算の見込みや裏付けがあるわけではなく、翌年九月三十日牧野事務部長は、I. 病院の将来計画、II. コンピューター化の推進、III. 医学部―病院事務の一体化の三項目を要

約している。そこでわたしは将来の病院改築をイメージし、委員の自由な発想を促して各科が要望するスペース、病床数をもとに病院の将来設計図(私的案)を金沢工業大学の水野一郎教授(現・同大学―副学長)に私的にお願いした(昭和六十年七月十三日)。水野教授は大学院生指導のもと、①わかりやすい病院(待合、外来、中診の三つのステーションを軸に各機能を集約させ、医師・看護サイドにも、各部門、各室の位置、場所を明確にわかりやすく集約化)、②明るい病院(外来ステーション吹き抜け上部にある大屋根から、ガラスを通し、外光がステーション全体にそそがれ、今までの暗いイメージを一変させ、外来、診療棟にあるトップライトにも同じ効果を期待させ、また、病棟部は囲み型N Sビル方式を取り入れ室内に外光が当たるよう試みる)③待合コーナー(外来、中診各診療科ごとに、共用的通路とは異った待合コーナーを設け、気になる視線の排除、スムーズな通行の確保等を試案)、④拡張可能な病院、⑤K・U・H・としての権威と趣をモットー(正面エントランスの大開口部にみられる包括力、横に広がる外来病棟の大きさ、そして高層病棟群の未来へも続く躍進性がK・U・H・としての権威と趣を建物全体で表現させる)とした独自の十二階建て大規模病院



モデル(待合ステーション、外来診療部ステーション、中央診療部ステーション+病棟部ステーションに機能を集約)(第一案)、また、第二案として一現敷地を「建て替えながら」(四期にわたり)進めるPLANを二十三ページにわたる図面でご提示してくださった(付図)。当初の委員会か、科長会かで村上誠一教授は「高層の病院新築に当っては、旧館の後方は崖であり、また旧館の台地には地盤強化のため松材が打ち込まれている可能性がある(例：旧海軍省)」と聞いているので慎重な地盤調査が必要との意見を述べられた。地盤調査の結果、松材が打ち込まれた形跡はなく地盤も高層建築に十

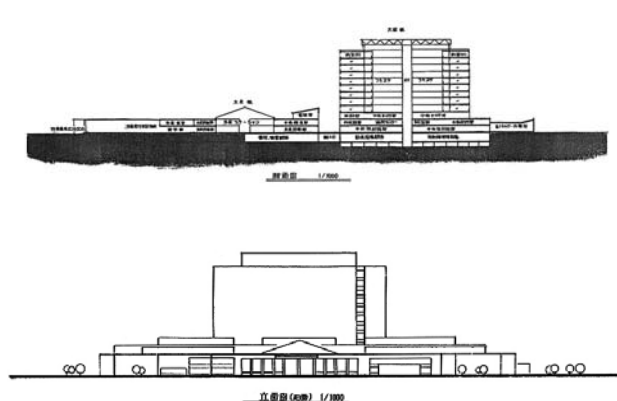


分耐えうるものと判断された。しかし後年、十階以上の建築は、「金沢市景観条例」に違反することを指摘され、医局、病棟の移転を繰り返しながら一先ず現在の新病棟が建設された。

一方、昭和六十年(十月十四日)には、文部省特定研究：二十一世紀に向けての医学と医療一研究委員会(本間三郎・委員長)の一班として「二十一世紀に向けての内科学の展望」(世話人国立療養所中部病院・院長、名古屋大学名誉教授・祖父江逸郎)が名古屋・観光ホテルに於いて開催され五大学の内科系教授が首題に関し討論した。わたしは「CDE報告からみた内科学の将来」を提言した(本間三郎編「医学研究の動向」196-206,1987)。111ではこの時点で考えられた将来の内科学と他の専門分野との関連、医師教育・訓練を予想した病院の組織系のシェーマを示した

が、今日の目からすれば当時予想できなかったIT部門の重要性が医事情報部に加えられるべきであった(註：CPED: General Professional Education of the Physician)。

院長在任中、忘れ難く想起される歓喜は、大型コンピュータや関連機器を導入し国立大学初の外来患者受付自動化など病院トータル・システムをスタートさせた記念にオープン・パーティが行われた(10-25,1984 北國新聞：「コンピュータ医療の最先端を目指して」)の情景である。ところがほどなくして十二月十七日にコンピュータディスクシステムの故障により受付業務が混乱した。技術者が帰京の途次にあり、院長は責任者叱責の立場に立たざるをえなかった不面目もあった。いま一つ記すべきは、時の西田尚紀医学部長は、しばしば院長と懇談することを提案された。就任半ばの頃「叢林なくして禅なし」の言葉に倣い「大学と病院は緑あふれる環境でなければならぬ」の趣意を色鉛筆で絵に描いてわたしに示され、キャンパス緑化の実現を提案された。やがて岡本肇名誉教授の尊い寄附金によって翌年三月、十全講堂前のプロムナード両側にケヤキが、病院正門側にはアメリカ楓が植樹された(2-14,1985 北國新聞：「ケヤキ並木実現へ」)。現在、ケヤキは大木に育ち学林と



しての雰囲気を感じられる。

最後に付言するとすれば、現在の病院の竣工を目前に平成五年、金沢大学医学部附属病院と金沢大学附属がん研究所附属病院の統合に関する合意書が、当時の責任者・竹田、広根、亀山、磨伊の四者によって協議を重ね完結したことである。すでにお三人が鬼籍に入られ、今昔の感にたえない(執筆に当たりあらためて金沢大学医学部附属病院・Kanazawa University Hospital Projectの図面を御教示いただいた金沢工業大学・水野一郎教授に感謝申し上げます)。

宝町団地回想ノクターン

前十全同窓会会長

佐藤

保 (昭和三十五年卒業)

この度、同窓会報編集委員会より宝町キャンパス整備事業竣工特集号への寄稿を依頼されましたので、私が会長職を務めておりました時期に感じておりましたことを思い出すまま述べてみます。

整備事業は平成九年より二十七年に亘って続けられた医学部全体の事業です。で、十全同窓会が直接関わった事業はそう多くはありません。図書館分館の改築整備、記念館展示室の改装、十全講堂に至るプロムナードの整備などが主な事業ですが、その間に医学部創立百五十周年記念事業が絡んでおりますので、すべてを含めると、医学部の歴史と伝統、現況と未来に関わる大事業でありました。

平成十八年に竹田会長から会長職を引き継ぎましたとき、私に課せられた宿題として念頭にありましたのは、百五十周年記念事業を成功させることでした。折しも我が国経済はリーマンショックの影響でバブルが崩壊し、デフレ不況の真只中にありました。医療費抑制のために診療報酬も削減されておりましたので、同窓会員の皆様に記念事業への寄附をお願いするのが心苦しい状況でしたが、全国同窓会支部の協力をいただき、無事に百五十周年の諸事業を行うことができ、この誌上を借り改めて感謝申し上げます次第です。

今日、宝町キャンパスをお訪ねくだされば、新しく設けられた正門から十全講堂まで一直線にメインプロムナードが延び、右手の新図書館には十全記念集會室が皆様のご利用をお待ちしております。

十全講堂奥の記念館一階には、落ち着いた照明のもとで、歴史的な記念品の数々をご覧いただけますので、是非一度立ち寄りください。

ハード面での整備は見ていただければわかりますが、ソフト面での変革は表からではわかりません。しかし現実にはソフトの方が社会的影響が大であります。平成十六年四月から新しい臨床研修制度が実施され、医学部卒業生は卒業後二年間、各自が希望する病院で臨床研修をすることが義務づけられました。その結果として、学んだ大学でそのまま臨床実習をする学生が激減し、全国へ分散した卒業生を同窓会員として把握することが困難になりました。この傾向をさらに助長したのが、平成十七年四月に施行された個人情報保護法であります。実際に同窓会が新しい会員を把握できず、会員名簿の作成ができない事態がおこりました。平成十八年に予定されていた会員名簿の改訂は見送られ、このままでは同窓会組織自体の維持が危惧されました。

この事態は当然、大学における臨床研修医の人数にも影響を及ぼし、ひいては

教室が新人医局員を募集することも困難になります。このことは教室員の維持ができず、これまでの医局制度が崩壊することを意味します。さらに従来、地域医療は大学の医局がその維持運営に当たっていましたので、社会的には地域医療の崩壊を生み、医師の大都市集中化を促進する結果となります。これまでも我が国では、政治・経済の東京一局集中が問題視されておりましたが、この制度改革で医療面でもその集中傾向が強くなることとなります。

それを避けるために、文部科学省は国立大学の独立行政法人化なる施策を打ち出し、各大学に独自の組織改革を求めました。金沢大学もその要請に応え、管理機構の改革、学部の整理統合につとめ、その結果、医学部と保健学科は統合され、附属病院は大学直属となりました。各医局で運営されていた地域医療も病院の管理下におかれ、従来医局にあった人事権は教室から分離されました。こうして大学病院の性格は一変し、大学病院自身も研修医獲得のため、研修内容の改革に努力せざるを得なくなりました。さらに地域医療に貢献するための特定医学部定員枠も増加されました。最近ようやくそれらの努力が実を結んで、卒業者の大学病院での研修も増加傾向に転じております。

この間に我が国の社会情勢は大きく変化し、少子高齢化が進んで人口は減少に転じ、国の財政赤字は存立の基盤を揺るがすまでに膨らんできました。世界に誇った国民皆保険制度も、抜本的改革が求められております。社会的格差が増大し、生活保護世帯が急増して、セーフティ

イ・ネットの再構築が求められています。そのような情勢の中で、平成二十三年三月十一日、東日本大震災が突発しました。その影響は甚大で、戦後、我が国が歩んできた政治・経済・社会の根幹を揺るがすものでありました。政府がそれまでとってきたエネルギー政策の安全性、将来にわたる国民生活の安全保障を一挙に突き崩し、国民一人ひとりに生活意識の改革を迫る事件でありました。その結論は五年経過した今も模索中であると思われまます。

今日、宝町キャンパスの正門に立ちますと、新装なった中央診療棟、病棟、臨床研究棟、基礎医学棟、図書館、十全講堂、記念館、立体駐車場、メインプロムナード、キャンパス周囲を巡る遊歩道と見事に整備された空間にこころ休まる思いが沸いてきます。しかしこころは同時に、「死をまぬがれぬ人間一人ひとりの終の棲家」でもあります。そのためにいつまでも、最先端の「医療と心の殿堂」であり続けることを祈ってやみません。



学風

東北大学名誉教授・元監事 金沢大学名誉博士

岡本 宏 (昭和三十九年卒業)

およそ大学には学風と言ったものが感じられるはずであるが、具体的にそれを表しうるほどの学風をもつ大学は稀有である。学風とはその大学の歴史の中に生きた教授・研究者の学問上の業績や教育の実績とそれを取りまく環境により醸し出されるものであろう。金沢大学を全体として見れば金沢大学が緑多く古都の雰囲気に環まれた金沢城から角間へ移転したこと、学部・学科制から学域・学類制へ改組されたことから、それまで培われてきた学風形成の要因が一変してしまっ

た。金沢大学医学部は小立野の地に止まったが学域・学類制になつてしまった。

医学部同窓会からは「金沢大学医学部百年史」が昭和四十七年に、また「金沢大学医学部創立百五十周年記念誌」が平成二十四年に出版された。これらの二つは大著であり歴史的な詳しい記述がある。これらを見ると、最近の五十年間は医学部や附属病院の建物が次々と新しく立派になつていくことが目立っている。そして、その前の五十年では金沢大学医学部（一部旧制の金沢医大も含め）の学生は外科学、医化学、薬理学の講義や実習を、学士院賞を受賞した教授達から受けており、医学部全体が活気に満ち日本を代表する医学部であつたことが解る。「百年史」にはこれに関する学生達の想

い出がいろいろと語られている。これら学風に繋がり得る良き伝統は昭和四十年代前半で途切れてしまった。

歴史の古さや建物・銅像を誇るだけではこの伝統は回復しない。毎日毎日、大学へ集う教師・学生は如何にphilosophieren (to study the fundamental nature of knowledge, reality, and existence) しているかが問題であろう。教授たる者は先の五十年、さらには百年・二百年を鑑みて教育・研究に専念すべきものと思う。かくして往年に優る金沢大学医学部が築かれてゆくであろう。そして宝町キャンパス整備事業の発端となつた十全講堂への榊並木と共に新たな学風が形成され学生達の心に残つてゆくであろう。

左に西田尚紀先生（細菌学名誉教授）が私版本に記された榊並木道の起源について抜粋・引用させて頂くことにする。

『榊並木と歩道』

昭和五十九年秋、十全講堂の百七十米の大通りの両側に大樹の並木を植えるように思った。そして岡本肇先生を口説いた。私はこの頃の大学の環境対策委員長だったのでこれを実現したいと考えた。この頃、私の教授室が岡本先生に近かったが、岡本先生が学会から賞を贈られておられたので、「賞の一部を戴けないか。」

と恐る恐る申し上げた。

その時、岡本先生は「うん、判ったよ、これを持って行け。」そして「この中には学会からもらった賞金がある。」と言われた。そして更に、

「君は今、大学に緑をつくる為に、寄金を求めているが、これを持って行け。」と言われ、ぶ厚い封筒を渡された。

「先生、これは、どれだけの札が入っていますか。」と問うと「二百万だ」と言われ喜ぶより先に驚愕した。

茫然としている私に、先生はこともなげに、「大学に緑をつくるんだ、持つて行け。」と云われ、私の手にねちこみ様に二百万円を渡された。

果然としていた私は、その大金をいくら減じたいと思つたが、

「こんな大金はオレには必要が無い。」と言われ、私の手にねちこみ様に押しもどされた。私は何も言えず、部屋を出た。そして先生の部屋に向かいフカフカと一礼した。

明けて次の年六月の梅雨時となると五米もあるこの並木は既に一つの風格を示し出した。先生を連れて榊並木を眺めつつ、その道を歩いた。

今、大学のまわりは樹林にかこまれてゐる。岡本先生が亡くなられても、私はいつも樹林を見て岡本先生を思い出す。今先生が亡くなられて数十年を経たが大学を取り囲む樹々はすくすくと育ち学生達は樹々の下で語らい、時として本を読



榊並木を歩く岡本肇と西田尚紀（左）
（北國新聞社から筆者に提供）

んでいる。

天国の先生も喜んでおられると思う。付記 ついでに述べておくが、大学病院正面に二百万円の残り金でアメリカ楓二十四本を植えた。秋には真赤になるに違いない。「叢林なくして禅なし」と言つて金子学長に説明し了解を求めたが、その日まで生きていたい。

『四十四年の夢』

(昭和六十一年三月 西田尚紀著)

『二本の道 流れゆく時と共に』

(平成十九年十月 西田尚紀著)

活文堂印刷株式会社

後記 尚、並木の榊を移したり、枝を切ったりする際に当時の環境委員長太田五六教授や中西功夫医学部長がその度ごとに仙台へ電話連絡があり、誠に仁義が固いことを知らされた。

祝宝町キャンパス整備竣工、そして――

元金沢大学医学部長

馬淵

宏 (昭和三十九年卒業)

金沢大学宝町キャンパスの整備事業が開始された当時、医学部長の職を仰せつかったものの一人として、今日の竣工は感慨一入のものがあります。宝町キャンパスの威容は病院側駐車場から医学部まで、どのポイントから見ても、全国の大学病院の中でもトップクラスであろうと確信します。「金大病院はすごいね」という患者さんの囁き声も聞かれます。



季節とともに、桜、木蓮などが金沢市内の銘木として有名ですし、秋には樺並木、アメリカ楓が色鮮やかに、これら紅葉の木々が奥まったキャンパスの隅にあるのが、もったいないくらいです。私は薬学部校舎引越しの研究室をレンタルオフィスとして使用させていただいています。卒業後約五十年間、臨床と研究に従事する境遇となっております。宝町キャンパスの移り変わりにも身近に接しており、喜びとともに、「さて、次は？」となってしまうのも、長年の習性かもしれません。私達が医療、医学研究に従事した昭和四十五年頃は全く酷いものでしたが、最近の大学病院は勿論、研究環境も飛躍的に改善されました。同窓会の諸先輩や地域の皆さんにキャンパスをご案内するツアーガイドがあればより親しみと理解が深まると思います。研究室も素晴らしいクリーンになり、スペースにも余裕ができてきたように思います。

医学部正面には、高安病の発見者、高安右人博士の胸像も再建立できたのも、ハーバード大学眼科学教授、広瀬竜夫先輩同窓生の肝いりと、河崎一夫眼科名誉教授の支援、臼井澄先生の資金援助があったればこそ完成です。臼井先生は小生の同級生で、十全同窓会には物心両面にわたりご支援を受けていることを感謝いたしております。宝町キャンパスの

医学部の正面にあります第一期生の群像には、同級生の稲坂暢先生の祖父がいると誇らしく語っています。

宝町キャンパスの整備に当たって、失ったものも少なくありません。薬学部とがん研究所が角間移築され、医学部野球場、テニスコート、道場(体育館)はなくなりしました。宝町キャンパスと鶴間キャンパスを連絡する陸橋はすぐにでも必要なものでしょう。

さて、次なる期待は何でしょうか？金大工学部移転後の跡地の整備が開始されたようです。金沢美術工芸大学が工学部跡地へ移住することが決まり、医学部にとっては千載一隅のチャンスが巡ってまいりました。美大の跡地をお借りできないものでしょうか？実現にはまた、数年の年月が掛かると思われませんが、大学の幹部諸先生、政治家の諸先生、同窓会の皆さんの奮起を期待したいものです。

金沢大学所縁の諸先生で臨床および研究業績が全国的、または世界的に知られた先生はおられないでしょうか？前述の高安病(脈なし病)、イタイイタイ病、泉熱などが思い出されますが、ノーベル賞や文化勲章には至らないが、学士院賞、その他の一定基準を満たした研究は「金大医学研究殿堂」入りと顕彰してはどうでしょうか？殿堂はどこにあるのでしょうか？兼六園の中にある金沢医学館を宝町キャンパスに移築し、歴史的な展示品とともに研究内容を展示してはどうでしょうか？金沢医学館は現在公園管理事務所の作業所として使われていますが、どなたもその歴史的な価値を認識しておられません。宝町キャンパスこそ管理運営にふさわしい場所と思われま

す。次なる宝町キャンパスの整備に向けて一歩ずつ進みましょう。



金沢大学附属病院・新病棟の思い出

元金沢大学附属病院長

利波 紀久 (昭和四十年卒業)

神戸国際会議場で平成十四年十一月三日に開催されていた第四十二回日本核医学学会総会開催の時に金沢大学附属病院院長の小林健一先生の急逝の知らせを受けました。私は三人の副院長の一人で、幹部役員会、評議員会、将来計画委員会などの出席を命ぜられ、本部の角間に連日のように通っていた。当時、学長をされていた林勇二郎先生は、国立大学法人化、金沢大学附属病院の新病棟建設の難題に直面されていた時期で、将来の金沢大学の行く末を熟慮されていた。金沢大学附属病院の総収入は百八十億円ほどと記憶しているが、附属病院の収入の多寡は金沢大学の死活であった。元金沢大学病院院長の河崎一夫先生の提言に述べられているように「独立法人化のもとでは附属病院の収入は他部局から狙われるだけ」という警戒感が附属病院一部に生じていた。他学部の新建造物費用は国に返却しなくても良く、附属病院は収入があるから半分は支払わなければならないという規定があった。新病棟で使用する最新の医療用装置も支払いの対象となる。新病棟も教育、研究にも使用されるので考慮されてしかるべきと思っていた。林学長にご足労をいただき旧十全講堂で国立大学法人化についてのご講演をいただきました。当時、国から運営交付金が支払われており、一パーセント減になると報じられていた。今は一パーセント減の積み

重ねがボディブローのように効いてきている。DPC (Diagnosis Procedure Combination 急性期入院医療包括払い制度) が開始されたのは平成十五年四月一日である。入院期間中に医療資源が最も投入した「傷病名」と入院期間中に提供する「診療行為」の組み合わせから分類した患者群であり、一日当たりの包括点数が設定されている。病院長に就任した折に、厚生労働省のDPCの発案者に尋ねたがどのように機能するかは発案者にも判らなかつた状況であった。急性期入院医療については機能係数も盛り込まれたが、未だに不明な点も多い。

元金沢大学病院長を務められた故高島力先生の記された報告によると、『金沢大学宝町団地再開発計画は基本構想が平成七年十二月に医系部局将来構想委員会で策定され、故宮崎逸夫病院長が文部省医学教育課をはじめとする関係部局に説明を開始したのが陽の目をみた始まりである。平成八年六月二十八日の第五六八回金沢大学評議員会で全学の合意を得た後、病院再開発を中心に具体的行動を起こしていくということなどで、平成九年度の概算要求の運びとなった。その内容は、まず病院再開発のなかで病棟をI期とII期に分けて工事を始め、その後スクラップ・ビルド方式で順次、中央診療棟、外来棟を完成させていくという案

で、文部速報第五五二〇号 (平成八年九月三十日) の「先端医療に対応した大学病院の整備」という項目の中に金沢大学病棟という名前を見つけた時の感激は一生のなかで最大級のものでした。』と述べておられる。アイソトープ病棟の建設は私にとっても最重要課題であり、親しくしていただいていたオランダがんセンターのHoefnagel教授をアムステルダムに尋ね、アイソトープ治療病棟、大量投与によるL-3-MIBGの神経芽細胞腫の治療の様子をつぶさに視察した。アイソトープ病室前室に家族が宿泊できる専用ベッド付き部屋が設置されていた。同様の家族専用室を病院事務部に要望したが受け入れられず、現在は家族待機室 (兼モニター) に変貌していると承知している。高額な設備費用がアイソトープ病棟にかけられていたことは承知していた。附属病院事務部はできるだけの譲歩はしてくれたと今は理解している。名古屋市中で開催された第五十六回日本核医学会総会 (二〇一六) でシンポジウム「骨転移治療の新しい選択肢の探索」診療科横断的な取り組み」で絹合清剛教授は見事に大役を果たされた。α線放出核種が治療に応用される時代である。我が国を代表するアイソトープ病棟として脚光を浴びるだろう。五十年以上は利用していかなければならないアイソトープ病棟である。

新病棟は小立野台に大きくはばたく目をみはるほどの地上十階、地下一階、延べ面積四二、二四〇平方メートルの陣容で舟形に柔らかく優美に湾曲し、周りに威圧感を与えないように工夫されている。元病院長の河崎先生はその外壁色

は、武家屋敷の土塀の色をイメージし、金沢の街にしっかりとてつけ込んでいる、と述べられている。内部に入っても違和感がなく曲線が心をなごませる。阪神淡路大地震が起ころうともしない地震構造で、私も機会があり、地下に入り拝見したが、多数の円形の免震建造物が巨大な病棟を支えていることを実感した。金沢大学附属病院が発展できたことに対して、故宮崎元病院長をはじめとする歴代病院長や事務部の方々に感謝申し上げる。



臨床研究棟（C棟）第Ⅱ期工事 「渡辺基金」

十全同窓会会長

中村 信一（昭和四十三年卒業）

渡辺治先生は昭和十五年に旧制金沢医科大学を卒業、大里内科（現 循環器病態内科学）に入局され、昭和二十三年、医学博士を授与されました。昭和二十二年五月、石川済生病院（現 石川県済生会金沢病院）院長事務取扱、同年七月に同病院病院長にご就任、昭和二十九年に退職、学生時代から縁の深かった橋場町にて内科医院を開業、八十歳まで地域医療に尽くされました。平成十年四月にご逝去されました（享年九十四歳）。

渡辺先生に初めてお目にかかったのは平成五年の十全同窓会総会であったと記憶しています。私が十全同窓会会報編集委員長をしていたせいでしょうか、先生から「腰が痛くて整形外科に入院し、大変お世話になった。何か恩返しをと・・・」とのご相談を頂きました。一年後の平成六年四月、微生物学教室の教授室に渡辺先生がお見えになり、一億円ものご寄附の申し出がございました。



金額の大きさに驚き、渡辺先生のご意思を最大限に尊重するには如何すべきか色々考えをめぐらせ、将来の医学部の根幹をなす事業に資することとし、「渡辺基金」を設立致しました。爾来、医学部教授会の下に設けられた渡辺基金運用委員会が大切に管理してきました。

臨床研究棟新築は、宝町キャンパス再開発計画の最後の新営事業であり、第Ⅰ期工事は平成二十二年三月に着工、第Ⅱ期工事も平成二十三年度には着工されることが期待されておりました。しかし、政権交代（平成二十一年九月）等により第Ⅱ期工事は仕切り直しとなり、新たな視点での説明・折衝が行われることとなりました。途中投げかけられた大きな難題は、がん研究所が角間に移転した後の空きスペースを代替えさせてはどうかという文部科学省の担当部署からの提案でありました。旧臨床研究棟の総床面積は一万一千平方メートル、臨床研究棟第Ⅰ期工事は八千平方メートル、旧がん研究所建物が三千平方メートル、後二者を足すと前者に相当するという計算でありました。しかし、旧がん研究所は、連合大学院、子どものこころの発達研究センター、共同大学院等、本学の更なる発展のための全学共用教育研究棟として整備することが構想されており、また、臨床研究の円滑な推進、診療への迅速な対応、

研究分野間の連携などのためにも、臨床研究分野の研究スペースと居室は、臨床研究棟第Ⅰ期分に隣接させて確保することが必須でありました。

以上のことを中心に関係各部署に大学を挙げ粘り強く説明・折衝を重ね、文部科学省のご尽力、さらには森先生をはじめとする国会議員の先生方のお力添え、また、関係諸機関の皆様のご支援を頂き、平成二十三年十二月、三千平方メートルの床面積を持つ臨床研究棟、第Ⅱ期工事が、予算の一部を自己財源から捻出することを条件によりやく認められました。自己財源の捻出、これは大変厳しいものでした。この窮地を救って頂いたのが「渡辺基金」でございました。平成二十四年四月、医学系の悲願である新たな臨床研究棟着工に際し、自己資金として「渡辺基金」を工事に活用することが医学系会議で承認されたのであります。渡辺先生のご遺志に叶うことが出来たと安堵いたしました。渡辺先生への感謝の意を込め、先生のレリーフを臨床研究棟一階に設置させて頂いております。

臨床研究棟第Ⅱ期工事の着工・竣工は、当初計画から考えますと少し遅れたとも言えるかと思いますが、結果的には、医学部創立百五十周年の年、平成二十四年に着工し、学域学類制第一期生が巣立った年、平成二十五年度に竣工したことになり、まさに金沢大学総合移転・再開発の掉尾を飾るに相応しい事業になったと感慨深いものがございます。

臨床研究棟（C棟）竣工記念式典が挙行された平成二十六年は、渡辺治先生の十七回忌の年法要、奥様久子様の一周年法要でありました。お二人揃った年忌法要

の年に、くしくも臨床研究棟が完成したことをお二人も喜んで下さっておられると確信いたしました。すべての病をあまねく癒すことは、医学の究極の目標であり、医学者の理想とするところであります。加賀藩彦三種痘所設立に関わった蘭方医黒川良安とその門下生達の心にあつたに違いない「人命を救わんとする強い願いと未だ不確かな治療法に対する恐れなき挑戦」、このことを胸に刻み、この臨床研究棟で、これまでも多くの病気の根絶に寄与されることを大いに期待致します。



後列左から
森 喜朗 第八十五代、第八十六代内閣総理大臣
金子 周一 医薬保健学総合研究科長、医薬保健
研究域医学系長
石田 陽介 金沢美術工芸大学教授、ご夫妻
前列
中村 信一 第十代金沢大学長
渡辺 治先生のご血胤
和沢 雅人様、和沢 美枝子様、和沢 一美様

新・金沢大学病院、外来棟竣工と病院内部 外郭整備に向けての八年間の顛末

元金沢大学附属病院長

富田 勝郎 (昭和四十四年卒業)

一、「外来棟は三階まで」を「三階屋上を四階にしたい!」と欲張る!

二〇〇六・四〜二〇〇八・三 (平成十八年〜十九年) 病院長一期目

時はまさに国家指導で「新臨床研修医制度」の発足と「七対一看護体制」奨励策が敷かれ、この二重の引き金で、全国的に医師・看護師不足の嵐が吹き荒れ、医療が大混乱に陥った時代であった。そんな中で旧・金沢大学病院の解体継続と新外来棟建設工事が始まる頃、私は病院長に選出された。

その初めての全国大学病院長会議に上京した折、「建物つて目に見えない基礎工事こそが一番肝心なですよ。後日になって、もう一階増やしたい、と思ってももう後の祭り。基礎を付け足すのは不可能なので、できないんです!」と耳にした。「オオッ! 我が金沢大学病院は今、外来棟の基礎工事を始める所だ! 手術・中央診療棟が原案以上にかなり大きくなった分、外来棟は三階までに縮小され、致し方なし!」とされていた。しかし、病院の正面から見ると左棟は四階、右棟が三階では、左右非対称形で見苦しい! 外観も大事だ。新外来棟も四階にすべきじゃないか!」と直感が走った。金沢へ帰ると急いで林学長に嘆願した。「今の外来棟図面は狭すぎる。将来どうしても四階まで必要になる! その予定で四階

仕様の基礎工事に変更してほしい。独立行政法人になり、国からの予算も先ずばみというなら、自助努力でも建てたい」と無理を言い、修正OKしてもらった。

「どのように屋上を利用するのか?」

その答えは直ぐに出た。「執行部は常に病院全体を俯瞰して捉えられる位置にいて思考すべき。そうでないと実践的な良いアイデアは浮かばず機動力も乏しくなる」と主張し、まず、地下予定だった病院長室、事務部、看護部などを屋上 (四階) に、リハを地下に、と変更した (平成二十一年五月)。

他には? 「そうだ! 会議室が欲しい!」。それまで病院の全ての会議は、西病棟一階の三病室の壁を取り払った細長い合同カンファランス室で行われていた。しかし、お互いに顔は見えず声も聞きづらく、会議の体を成していなかった。

「講堂・会議室が欲しい、屋上に造りたい!」だけど資金がない。そこで済美会の福田、波多野両理事に頭を下げてお願いしたところ「大学病院あつての今日の済美会。今こそ恩返しの時だ!」と大英断され、数十年間、汗と血で蓄財されてきた大金を大放出して頂き、あり得ないほど立派な「宝ホール」が完成した (平成二十一年五月)

ちなみに宝ホールは「患者さんが病気を克服し健康を取り戻してもらえよう

う、全職員が思いやりの心で全力を尽くしている。そのような患者さんと職員の心の通いこそが『宝』であり、その象徴の場として役に立ってほしい」との思いで名付けたものである。現在では病院の全ての会議は勿論のこと、関連病院長会議、研究・学会発表会場、各種情報交換会、患者さんとの交流・憩いの場などに利用され、病院の意思決定・情報発信の要のホールとなっている。

三階屋上はその後、輸血部、アフエーシス室、卒後研修医室、CPDセンター (平成二十五年四月) など、年々アイデアが生まれ、八年の間に全て完成し、屋上から四階の姿へと生まれ変わった。

二、新外来棟が完成。大々的な引越と診療開始 (電子カルテ導入)

二〇〇八・四〜二〇一〇・三 (平成二十年〜二十二年) 病院長二期目

ついに新外来診療棟が完成し、これまで外来診療から検査・入院・治療に至るまで全ての診療が新病院内でできるようになった。ここに至るまで、歴代の病院長始め、綿々とどれだけ多くの方々が陰に陽に苦勞されてきたことだろう……。それら全ての方々の想いを込めて、皆さんと共に労をねぎらいお祝いをしたい! の思いで、正面玄関内のプロムナードホールで盛大に式典・祝賀会を行うことにした (平成二十一年四月二十五日)。

参加者は文部省関係者、森元総理、飛田北國新聞社社長 (石川経団連会長)、谷本石川県知事、山出金沢市長を初め、歴代の学長、病院長、教授、各界関係者、各関連病院の病院長、病院工事関係者、病院職員など、延べ五百人を越し、ホー

ルに入りきれない大勢の笑顔で大賑わいだった。

ホールの天井から吊られた巨大な三つの金色のくす玉が割られ、「新金沢大学附属病院・完成!」「人間性豊かな医の心で、思いやりのある医療を!」「最高の技術で最善の医療を!」の垂れ幕と紙吹雪の舞う中で「乾杯」「万歳」が繰り返され、士気と熱気に満ちた大祝賀会となった。それほど誰の目にも、皆々がこの日を待ち望み、喜び合っているということが明らかであった。

また六月にはこのホールで患者さん向けに、新垣勉・院内ふれ愛コンサートを開き、これも歌手の熱唱と音響の良さが相乗して大好評であった。

ちなみにこのホールは、正面入口上のガラス張り越しに、北陸特有の雨風や鉛雲の空、旧外来棟取り壊し工事の無残



な廃墟姿が直接目に入り、心地いいものではなかった。それらを目隠しする目的で、教会のステンドグラスにヒントを得て「青空と虹・パノラマスクリーン」にしてみたところ、これが意外にも患者さんや職員からも大好評であった。

そこで四年後、執行部全員で下絵のイメージを作成したうえでプロ・デザイナーにお願ひし、現在のような金大病院オリジナルのパノラマスクリーンに漕ぎ着けた(平成二十五年七月)。この絵のメッセージは、「雨や曇りの日が多い北陸だけど、ここにくればいつも青い空、碧い海、白い雲、虹、真っ直ぐな道が微笑んでくれます。さあ、気持ちを新たに、希望に向かって、前向きに生きていこう!」という「癒しと励ましの呼びかけ」である。

さらに、欧米の大病院を真似て、ホールの雰囲気を作るくしと考えた。まず、郵政局が旧病院内の郵便局を撤去しようとしていたので、患者さんの利便性を優先して設置継続してほしいと理解して頂き、ホール入口の目抜き場所を提供した。次いでホール正面にあった入院センターなどの医療事務を病棟一階に移動し、複数のコーヒーストップをホールに面する一・二・三階スペースに招き入れた(平成二十四年六月)。これで病院ホール内に居ながらにして外出・解放気分にもなる。患者さんやお見舞いの方々がそこに座って飲み物を口にパノラマスクリーンを眺めながら、院内にいるのをしばし忘れて安らぎ、語り合っている姿を見ると、こちらも嬉しく癒やされた気持ちになります。

三、「PETのない大学病院なんて、ワインのないフランス料理みたいなもの!」

二〇一〇・四〜二〇二二・三(平成二十二年〜二十四年) 病院長三期目

平成八年に計画された再開発当時から既に十年以上も年月を経て、私が初めて病院長になった平成十八年の頃、がん診療にPETは必須の時代となっていた。しかし新・金沢大学病院にはなぜかPET導入の計画は全くなかった。当時の林学長にさっそく要請したところ、理事会で説明を求められた。「PETとは? いったい何なの?」と。その私の答が冒頭の「PETのない大学病院なんて!」である。

こうして当時まだ保険診療にもなっていないPETの重要性を理解してもらい、さっそく満を持して文部省へ嘆願に赴いたところ、「エッ、国立大学病院からのPET要請には全て応え、もうとつくに終了している。今更何を?」とけんもほろろ。しかしPET機器も建設費、運営費も全て高額過ぎるとはいえ、今やがん診療にPETは必須の時代となっていた。

そこで中村学長・古川理事の時代になってから大学本部・病院執行部が一丸となって知恵を出し合い、奥の手として最終的に今の姿、即ち経済界有志で大学病院敷地内に医療法人・金沢先進医学センターを立ち上げてもらい、そこでPET稼働を開始してもらった。この際、同様に保険の利かないプレミアムドックや癌免疫細胞治療も「金沢大学病院ならではの人間ドックを!」「最後の砦の一つとして癌免疫医療を!」という「一般の方々と医師」両サイドの期待を受けて、政府の許可を得て金沢先進医学センターで行うことにし、現在に至っている(平成二十三年一月)。

成二十三年一月)。

四、生涯研修教育の場…CPDセンターの設立、憩いと安らぎのスポット設置

二〇一二・四〜二〇一四・三(平成二十四年〜二十六年) 病院長四期目

私の病院長時代は全国的にも、能登・加賀地方でも、医師・看護師不足により医療過疎の嵐が吹き荒れており、何かと谷本県知事と胸襟を開いて解決策を話し合う機会が多かった。結論として、県全体の地域医療を安定して支えていく鍵は、医師・看護師たちが大都会へ流出していかないよう、従来どおり金沢大学病院が中心となつてしっかりと育成し、県全体に輩出していくシステムを強化充実させることだ、と理解して頂けた。

五年間、会話と交渉を重ねて、県の医療過疎問題を解決する大事業と勇断して頂き、その結論として外来棟四階(最後の屋上スペース)にCPDセンター(Continuing Professional Development)を設置することになった(平成二十五年四月)。いずれの日か地域医療に赴く若き医師・看護師達や、目下、地域で診療に従事している医師・看護師達が、日々ここで最新医療の教育・実践トレーニングを受けている。

五、正面玄関周りの装い、駐車場問題と病院内・外の癒やしと憩いの場!

従来の正面入口の構えは単に



一メートルの高さのコンクリートプロック門に灰色タイルを張ったものに過ぎなかった。そこで正面を整備するにあたり、明治時代に初めて宝町に建てられた正門図面を探した。出てきたのを見ればさすがに国の威信を受けてりりしい品格の面構え、いや門構えであった。しかも門柱が、みかげ石の原石から彫り起こしたものであることも知った。

明治↓大正↓昭和↓平成を通じて、北陸の医療をリードし、最後の砦の役をも果たしてきた名門・金沢大学附属病院の



品格を今後も矜持していく象徴として、それなりの門構えは必要だ！との強い思いになり、門柱、洒落たモチーフの鉄製の扉など、全て費用は自助努力で完全複製することにした。五十年に一度の大工事の総仕上げとしての顔、このことで許された。

一方、今年出来上がった大学病院の正面は、旧外来棟を更地にしたので広い駐車場に生まれ変わった。現在の外来患者数からすれば、これくらいは必要であった。しかし、前もって急遽、正面向かって左側に立体駐車場を建てておいてよかつたと思っている。市の景観条例のため三階までとなつたのは致し方ないが(平成二十四年七月)。なにしろ金沢は雨が多いうえ、冬は重い雪と格闘しなければならず、夏は強い日差しが車の屋根を焼

く。これらを一挙に軽減してくれるのは立体駐車場以外にない。将来もう一つ大きな立体駐車場を建てる図面になっているはずだ。それが完成すれば、現在、駐車場だけの広いスペースには花や緑を植える余裕も生まれ、金沢らしい四季の彩りに癒やされる大学病院風景となろう。

ところで欧米の大病院には必ず、病院の内外に遊歩道や緑地があつて安らぐ。この点を金沢市内の景観を最も大切に考えていらつしやる山出保金沢市長に相談して知恵を絞ってもらつた。答は明快だつた。「病院正面の塀に沿って、内側の土地を市に譲ってもらえれば、市道として整備しましょう。病院外に沿つた現在の狭くて危険な道路は致し方も無いが、それに沿つた病院塀内に遊歩道ができれば、入院患者も市民も安心してそこを歩けるようになる。憩いにも癒しにもリハビリにもいい。」目下、その工事が仕上げに向けて進んでいる。とても楽しみである。

ついでに、この八年の間に、病院内にも「癒やしと憩いのスポット」が三箇所造られていくのを存じだろうか？

その①「青空と虹」パノラマスクリーン(前述)(平成二十一年、平成二十五年七月更新)

その②「オルゴールハート時計」…玄関ホール・エスカレーター横に立て掛けられている。大学病院で手術した患者さん(九十八歳)が見事一〇〇歳を迎えられ、その喜びの家族からの寄贈、毎時流れる童謡メロディに癒やされる(平成二十三年)。

その③「宝の島」…外来・病棟を繋ぐ地下の中庭に、医学の父、ヒポクラテス



の聖地…地中海のコス島をイメージした「宝の島」…尊い命の原石を求めて”のオブリジェ…金沢美大生とのコラボ作品(説明プレート付き)(平成二十五年八月)。

以上、いずれも病院長の時、文科・厚生労働省の方々と病院長、海外の医師に病院内を案内する際、序で紹介し、大変感動していただいていた(絵ハガキあり)。

以上、思いつくままに書き留めてみると、この八年間の時期は国の政策で、大学本体が独立行政法人に移行したばかりの過渡期でもあつた。同時に国が医療の大改革を思い切つて推し進め、大混乱を招いた時代であつた。そんな中で病院再開業事業は着実に進められてきていたが、私が病院長を担当させていただいた四期八年間は、時代の荒波に流されまいと踏ん張りつつ、先人の描かれた大筋を尊重しながらも、どこか修正追加すべきところ

ろは無いか、と思索し病院の内外をせかせかと歩き回つていたような気がします。簡潔に言えば、即ち国の資金は先細りになっていく一方で、夢を描いても手元には未だ蓄財が無い、という苦しい状況の中で軌道修正しながら病院建設工事を進めた時代であつた。その姿は湖面を優雅に進む白鳥に見えて、その実、水面下では懸命に足をばたつかせて必死に水を漕いでいる姿であつたように思う。

しかし各学長・理事の方々はもちろんのこと、知事や市長、経済界の多くの方々、済美会、病院関係のOBの方々、職員、患者様等の温かい支援のおかげで、今日のような、他大学にはあり得ないような温かみのある大学病院が出来上がった、と思つている。関係の皆様様には今更ながら赤面しながらも、新病院の完成に向けて一緒に取り組んで頂いた連帯感が蘇り、心から感謝の気持ちで一杯です。

それ以上に、かつて金沢城内にあつた金沢大学が角間キャンパスに引越す！と決議された際、「病院医療は市民の近くにおいてこそ！小立野台に踏みとどまろう！」と病院教授会で決断された。その光景を当時の新米教授として想い出す(平成一年〜三年頃)。あれが出发点だったのだ！その後二十五年余にわたり多くの方々の知恵と苦労がバトン渡しされ、結晶したのが今の姿なのだと思うにつけ、感無量である。そう思うと正面からの光景が堂々と眩しい。その一端を担わせていただいたことに、今は感謝するばかりです。

宝町再開発事業完成に想う医学教育改革

元金沢大学医学類長

古川

仞 (昭和四十四年卒業)

医学類プロムナード・附属病院環境整備事業が完成し、それぞれの完成式が平成二十八年七月二日挙行された。目もくらむような炎天下、威容を誇る生命知の殿堂と真新しく整備された広大な構内を見渡しなが、式典の最中、私の脳裏にはそれらとは正反対の暗く陰気な旧基礎棟南地下室でのチュートリアル教育の一面面が思い浮かんだ。

私は平成十年、中村学部長から教務委員の一人に選任され、以後、馬淵・福田学部長時代(平成十二年〜平成十六年)に教務委員長を務めた。私に与えられたミッションは、医学教育改革を目指し、新カリキュラムの作成だった。最初に教育理念、「豊かな人間性とコミュニケーション能力を備え、患者中心の全人的医療を担う医師の育成と医学研究者の育成に努める」を定めた。そのための教育目標は、「明確な目的意識・強い使命感・高い倫理観と協調性を備え、自己問題提起、解決能力を有する人材の育成」を掲げた。これをベースに新カリキュラムを考え、学年進行で随時、変更と改善のための手直しを加えながら教育改革を進めて行くことにした。タイミングよく、平成十二年の十一月「医学生教育の質を保証する」という理念の元に、国の医学教育機構改革推進委員会からコア・カリキュラムの発表(正式には文部科学省、平成十三年三月発)があった。知の養成

については講義中心から問題解決型学習(PBL: Problem Based Learning)、チュートリアル教育実施へ向けての弾みもついた。もちろん全国の医系大学でも早急なカリキュラム改正を余儀なくされた。それでも学内では当初、相当な抵抗があった。「講義時間が半分以上に減る」、「教育に動員するマンパワーが大きすぎる」等々。幸い、同僚委員の力強い支援に恵まれ、めぐることはなかった。平成十六年医学類長(旧医学部長)就任と同時に、これまでの教務委員会を改組し、自分は教育委員長を兼任した。その結果、計八年間(教務委員から加えて)、医学部・医学類の新教育システム構築に直接携わることになった。

とかく批判されがちであった講義・知識(暗記)・大学病院中心と、縦割りの・画一的な教育から、学生中心で問題解決型・統合型・選択制教育と、地域特性に根ざした組織的教育体制へと動き出したのであった。PBLチュートリアル教育などはその典型例である。自立学習型教育を樹立するためのチュートリアル教育は平成十五年から開始した。実施要項、学習到達目標等を作成して、当初、一週一コースにおけるコア・タイムは前期が週二回、後期が週三回であった。十七年度からはすべて三回とし、診断・治療が中心のコース内容を症候中心の八コースに増加することになった。私の手元に残る

メモから当時のチュートリアル教育方法(平成十五年)を遡って見てみる。教育方法…チュートリアル教育等の小人数教育を導入し学生の討論力、発表力を養う。具体的方法…①三年次学生の新必修科目「医学・情報学」を充実に、EBMの基礎となる医学文献の読みこなし、その内容を理解するための医学統計学・医学の基礎、コンピュータ・インターネットを利用した医学・医療情報の取得方法等について学習させる。②コア・カリキュラムの採用と、それを行うためのチュートリアル教育のための人的、物的体制を整備する。同時にコア・カリキュラム後の評価としてコンピュータによる全国共用テスト(CBT: Computer Based Testing)を受ける。③CBT後は客観的臨床能力試験(OSCE: Objective Structured Clinical Examination)を実施する。両者はいずれも、医学生が臨床実習で医行為を行う上で、臨床実習直前の能力を評価するためのものである。その後は、学生が臨床現場を見学するだけではなく、実際の臨床に携わる臨床参加型実習(C.C.: Clinical Clerkship)の充実と、実習レベルの策定を計画する(平成十八年度)。④C.C.と同時に臨床技術向上のためにスキルス・ラボを用いた臨床前教育の充実化に努める(平成十六年度から)。この他にも、幅広く質の高い臨床能力を習得して国際的スタンダードに達する実力を獲得するための取り組みも計画した。このように医学教育の現場では次々と新しい試みや、様々な工夫が重ねられ、まさに明治維新に匹敵する教育改革が実施されていた。①コア・

カリキュラム実施状況の検証、②講義内容のデータベース化(e-learning)の充実、③統合型卒業試験制度の検討、④遠隔授業システムの検討、⑤入試方法の見直し(学士入学と後期試験のあり方、前期試験における面接導入とアドミッション・オフィス(Admission Office: AO)入試の検討)等の他、三学域構想における統合型カリキュラムの検討開始(医学科、保健学科、薬学部)などである(これらのいくつかは現在ではすでに実施されている)。附属病院との連携も重要な課題であった。附属病院が抱える地域医療を担う医師の養成・確保推進のために、①大学の医師養成課程における地域医療に関する教育プログラム、②地域医療を担う医師養成のための臨床研修の推進プログラム、③病院における健全な医師紹介システム確立など、課題は山積していた。

式典に臨み、長期にわたるキャンパス再開発事業の変遷と医学教育の加速度的な変貌とが猛烈なスピードで脳裏を駆け巡り、重なり合い、その両者に身を投じていた自分の姿がフツフツと蘇るのを覚えた。図書館医学系分館にはグループ・スタジオ、オープンスタジオ、研究個室が整備されていた。プロムナードの最奥にある医学部記念館も創立一五〇年を機にリニューアルされ、そこにも学生のためのグループ学習可能なスペースが設けられていた。これらを目の当りにして、私たちが進めてきた教育改革がこのような形で実を結んだのだと実感した。自分の人生の大きな区切りと感じられる感慨深い一日であった。

医学図書館の風景



宝町キャンパス整備に関する思い出

元金沢大学大学院医学系研究科長

松井 修 (昭和四十七年卒業)

この三月に金沢大学医薬保健学総合研究科の寄附講座の特任教授を終えるまで、学生時代を含めると、実に五十年以上をこの宝町キャンパスで過ごした(この間、約一年間文部省在外研究員としてキャンパスを離れたが)。この夏に、病院前の駐車場が完成し、素晴らしい近代的な病院の最終的な全貌が明らかとなり、長年待ちに待った新しい宝町キャンパスの出現に深く感動した。しかしながら、一方で、医学部に入学して目にした最初の風景のほぼ完全な消滅を実感し一抹の寂しさも感じている。

本稿は過去の整備事業に関わった研究科長の一人として執筆を依頼されたが、私が医学系研究科長を務めた平成二十二年から二十四年はすでにキャンパス整備事業の完成期であり、先人の流れに従ったものでほとんど思い出はない。しかしながら、病院や臨床研究棟の移転・新築や構想にはいろいろな影響を受けた実務者として関わってきたのでいくつかの思い出がある。

先に記したように、病院の正面に立つと、新病院の威容とともに洗練された近代的な病院という印象を受ける方も多いと思う。しかしながら、この新病院の基本的な構想がすでに二十年前になされていたことを知る人は、現在の住人には少ないのではないかと思う。私の前任の放射線科教授であった高島力先生が病院

長を務められた平成八・九年の間に、全体の設計がすでになされ、平成十年にはそれに基づいて病棟の建設が始まっているのである。その後中央診療棟、外来棟が建設され、平成二十一年に新病院全体が完成しているが、新病院の全貌を目的あたりして、二十年前に関わった方々の先見の明に心から敬意を表するものである。高島前教授が情熱をもって取り組まれている姿が思い出される。むしろ金沢大学や文科省の専門部署が基本設計・構想を練り上げたものと思うが、当時の病院長をはじめとする病院・医学部の方々の意向も多く組み込まれていると思う。この基本設計は当時、全国の専門家間で高く評価され、関連業界(あるいは学会)で受賞したと聞いているが確認はしていない。平成二十一年の外來棟完成時には、華々しい新病院完成祝賀会が行われたが、高島前教授をはじめとして当時の実務関係者の姿はなく、またその功績に深く触れられることもなく寂しい限りであった。完成までの年月の長さを改めて痛感したものである。

新病院の建設は同じ敷地内でありいわゆるスクラップアンドビルドで行われた。私が主として勤務した血管造影室はその影響をもっとも被った部門であった。放射線部門としては新興で、そのために中央放射線部ではなく旧病棟の一角に設けられていたが、その後の新病棟の

完成で病棟は移転し、その後の旧病棟の順次の取り壊しに伴って計三度の移転を余儀なくされた。だれもない廃屋のような旧病棟の一角で、急激に勃興したカテテルによる血管内治療(インターベンショナルアンギオグラフィー)を、関連各科とともに昼夜を問わず行ったことが、私の新病院建設に関連する忘れがたい思い出である。

宝町キャンパスの整備における実務としては、小泉病院長のもとで新外来診療棟の内部設計を、中沼研究科長のもとで臨床研究棟の内部設計(臨床各科の割り振り)の責任者を託された。いずれも旧施設に比べると狭く、臨床各科の調整には大変苦労した。外来診療棟については、当時の文科省の意向もあり完全予約制を実施し、診療を午後も行うことでコンセンサスを得、診察室を共有し最小限にすることで余裕のあるスペースを確保し、内部や臨床研究棟からのスムーズな動線も確保した。しかしながら、各科の外來診療を午後にも平均化して行うことは実際にはコンセンサスが得られず、旧来のように午前に集中することで多くの診察室が必要とされ、その後かなり修正され現在の形となっている。その結果として、臨床研究棟から外来・診療棟への動線が遮断され病院機能の相当のダウンとなっている。臨床研究棟も文科省の意向で、教官の居室はワンスパン、各科が共有するスペースを確保し情報交換を図るスペースを確保するといったコンセプトで各科と数多くの協議を重ね内部設計を行い決定したが、その後かなり修正されている。建物はハードウェアであるが、その内部設計は、病院の新しい在り方や

医局講座制に対する新しい今後の在り方といったものを織り込んだソフトウェア的な意味合いも大きく、文科省や大学本部の大学医学部や大学病院の今後の在り方に対する要望も組み込んだ内容であったが、いずれも委員会決定後に修正・変更され現在の形になっている。今後の折に触れての改善を期待したいと思う。

宝町キャンパス・新病院の完成を機に診療・研究・教育がさらに発展し充実することを信じている。



私が体験した創立百五十周年記念事業

前金沢大学医学部長

山本

健 (昭和四十八年卒業)

「宝町キャンパス整備事業」を締めくくる「創立百五十周年記念事業」を成功に導くまでに、歴代の記念事業推進準備委員会委員長（医学部長・医学部長）を初めとする関係者が何を夢見て何に腐心したのかを記録しておくことは、当事者の務めと思われる。

創立百五十周年記念事業の内容は、「金沢大学医学部創立百五十周年記念事業推進準備委員会」（以下準備委員会）が中心となつて練り上げられた。私が医学部長兼医学部長として準備委員会委員長に就任したのは平成二十四年四月であった。その時点で、歴代の準備委員会委員長・古川侃教授（平成十六年八月～平成十八年三月）、金子周一教授（平成十八年四月～平成二十二年三月）、井関尚一教授（平成二十二年四月～平成二十四年三月）によって、記念式典と記念祝賀会の大枠と日程は決定されていた。また、記念モノメントの製作ならびに記念誌編纂は、山本博教授の強力なリーダーシップの元で着実に作業が進んでいた。

表1に、準備委員会議事録から重要な決定事項を抜粋する（表1）。この議事録から、当初考えられていた「旧金沢医学館建物の移築」や「医学部中庭の旧書

庫を資料館に改装」案が紆余曲折を経て最終的に「十全講堂から正門までのメインプロムナード総合的整備事業」に絞り込まれたこと、「記念モノメント」の設置場所」が当初考えられていた医学部記念館前あるいは中庭から医学部正面玄関近くに変更されたこと、「記念モノメントの名称」が変更されたこと、祝典の記念品候補が、祝典挙行四カ月前になつても「紅白饅頭」のみであったことなどが読み取れる。

百五十周年記念事業の準備は、指導力に優れたワーキンググループ（WG）長各位によつて粛々と進められたので、山本健が委員長として汗をかいたのは記念誌編纂の担当部門のみであった。記念誌編纂は、WG長山本博教授（編集委員長ならびに第一部「通史」担当）を中心に、中尾眞二教授（第二部「教室史」担当）、加藤聖教授（第三部「余瀛」担当）、山本健が第四部「写真」を担当した。第四部「写真」は、平成二十一年六月十四日に（故）寺畑喜朝先生からご恵贈いただいた、膨大な写真史料なしには完成できなかった。泉下の寺畑先生に、改めて深く感謝申し上げる。写真1は、第四部「写真」の編集委員を務められた三邊義雄教授と山本健が、ご恵贈をいただいた一年後に、B棟研究域長室で写真の最終仕上げを行っているところである。もう一人の第四部編集委員佐々木素子准教



写真1. 記念誌第4部編集委員 三邊義雄教授、山本 健、ヨシダ印刷奥田奈津季さんと堅田英史さん。医学系B棟研究域長室。平成22年6月11日撮影。

授は、当日時間の都合がつかずご欠席であった。一緒に写っているお二人は、ヨシダ印刷奥田奈津季さんと堅田英史さんである。奥田さんは、医学部百年史、百三十年史に使われた写真と未使用の写真を選別する困難な作業を一手に引き受けて下さり、未使用の写真のなかから、編集委員が最終的に百五十年誌に掲載する写真を選定した。

記念式典・記念講演会・モノメント除幕式・記念祝賀会は、平成二十四年七月七日（土）に、小雨の中、滞りなく挙行された。記念式典が終了した段階では、百五十周年記念事業のうち「十全講堂から正門までのメインプロムナード整備事業」と「医学部記念館の改修事業」のふたつは予算規模が大きく、実現の見込みが立たない状態であった。然しながら平成二十五年秋に至り、中村信一学長、古川侃副学長ならびに金沢大学施設

部から、この二事業を一体として、平成二十六年度文科省「施設整備費補助金」に申請することが決定され、以後は学長、副学長のご尽力で計画が進んだ。さらに金沢大学医学部にとって幸運だったのは、「他団体との協働」の証として、それまで懸案であった金沢市の「遊歩道整備計画」が、まさにこの時期に実現に向けて動き出したことが挙げられる。また、「自助努力」の証として、会員諸兄から賜った浄財の残金約六千万円に加えて、十全同窓会から四千万円のご寄附を頂戴することができたことも、この補助金獲得に大きな力となった。当時の十全同窓会会長佐藤保先生、同理事長加藤聖教授の御英断に感謝申し上げる。

平成二十六年度文科省「施設整備費補助金」は平成二十五年十二月に閣議決定され、最大の記念事業案である「メインプロムナード整備事業」と「医学部記念館の改修事業」は、平成二十八年六月多久和陽記念事業実行委員会委員長の元で竣工した。

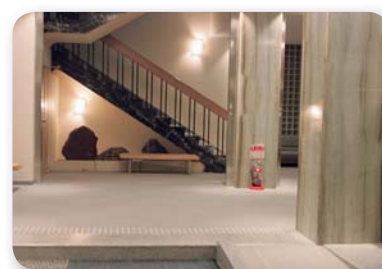
平成九年から始まった附属病院の改築を含めた「宝町キャンパス整備事業」の中で私が体験したのはほんの短期間であったが、連綿として受け継がれてきた歴代委員長と関係各位のご努力に敬意を表し、想い出話の筆を擱きます。

なお、表1の準備委員会議事録は、医学系総務係長小島直人氏ならびに前医学系総務係長山本修氏のご努力によつて発掘されました。深甚の感謝を付記します。

〈表1〉金沢大学医学部創立百五十周年記念事業推進準備委員会議事録

第1回	平成17(2005)年 4月12日(火)	発足時のメンバーは、古川仰教授(医学部長・委員長)、山本博教授(研究科長)、加藤聖教授、大島徹教授、中尾眞二教授、山本健教授、小泉晶一教授、橋本琢磨教授。記念事業の案として、旧金沢医学館建物の移管について意見交換。
第2回	平成17(2005)年 7月21日(木)	記念事業として5事業案を策定。①医学部記念館(資料室)増築②または記念館と図書館の新築③寄附講座新設④十全講堂と記念館との結合⑤市内中心部に無償の土地提供を受け、資料館新設。
第3回	平成18(2006)年 3月20日(月)	記念事業の一つとして、旧書庫を資料館(仮称)として活用することが承認された。また、石碑の建立について提案があった。
第4回	平成18(2006)年 7月13日(木)	金子周一委員長就任。記念事業として、①記念誌の作成、②記念式典の開催を承認、そのほか、旧書庫を資料館に改修すること、記念式典にはノーベル賞級の研究者によるシンポジウムを行うこと、旧跡となるような石碑の建立、奨学制度の創設などが提案された。記念事業を実現するため、4つのワーキンググループ(WG)(旧書庫:WG長大島教授、記念誌:WG長山本博教授、寄附金:WG長富田勝郎教授、記念式典:WG長未定)を設置した。
第5回	平成18(2006)年 10月24日(火)	各WG進捗状況報告と意見交換。
平成18(2006)年12月1日(金)に準備委員会と十全同窓会との合同打ち合わせを行った。①150周年事業としては、旧書庫改修にはこだわらない。②記念館資料室に保管されている資料は貴重であり、保存すべきであることが合意され、記念事業の方針が修正された。		
第6回	平成19(2007)年 5月28日(月)	各WG進捗状況報告と意見交換。
第7回	平成21(2009)年 5月28日(木)	①金子周一委員長から経過説明。②富田寄附金WG長から寄附金について報告。③全学の創基150年事業について。④山本博記念誌WG長から記念誌について説明。
第6回委員会から第7回委員会までに、2年間のブランクがある。この間、平成20(2008)年4月、事業計画について医学部教員への説明、および寄附金徴収への協力依頼がなされた。 平成21(2009)年8月、宝町キャンパスプロムナードのイメージデザインを、金沢美術工芸大学事務局長を通じて、金沢美術工芸大学坂本英之教授(環境デザイン)らに依頼。 平成21(2009)年9月全学の「創基150年記念事業」と医学部の「創立150周年記念事業」の混同を避けるため、寄附金の受け入れ口座として、「創基150年記念事業」(全学)とは別に「創立150周年記念事業」(医学部)を開設した。 第7回委員会の決定を元に、同窓会会報第143号(平成21年10月6日)に「金沢大学医学部創立150周年記念事業趣意書」を掲載。記念事業案は、①十全講堂から正門までのメインプロムナードの総合的整備事業、②医学部記念館の改修事業、③医学部150年史の編纂事業、④医学シンポジウムの開催、⑤記念式典の開催の5つが挙げられた。		
第8回	平成22(2010)年 5月25日(火)	井関尚一委員長就任。①記念館前にモニュメントを建立。②空中回廊の建設を含めた記念館の改修工事。③キンストレーキ修理のデジタルアーカイブ化。④記念シンポジウムの開催(十全医学会と共催)が記念事業として提案された。⑤プロムナード整備事業は費用が高いため、記念事業の候補から外すことになった。
第9回	平成22(2010)年 9月22日(水)	①モニュメント製作のデザイン案について決定。②キンストレーキ修理のデジタルアーカイブ化。③記念誌の刊行。以上3事業を優先して進める。④金沢医学館跡地の石碑建立について承認。⑤記念シンポジウム、記念式典を、医学部が独立して行うか全学と共催するかを同窓会との合同委員会で協議する。⑥記念館の改修は事業案として残す。⑦プロムナード整備を事業案に復活させる。
第10回	平成23(2011)年 3月24日(木)	①モニュメントの除幕式用の設置場所を中庭とする。②記念式典の日程を平成24(2012)年7月7日(土)に決定。③記念講演演者の選定については今後検討。
第11回	平成23(2011)年 6月23日	①モニュメントの設置場所を中庭から医学類玄関近くに変更。②記念講演の演者に本庶佑、安藤忠雄両氏を選定。③金沢医学館跡地の石碑の設置場所を決定。
これまでに何度か議論された石碑の建立は、「彦三種痘所跡地」石碑、ならびに「金沢医学館跡地」石碑として、いずれも平成23(2011)年11月に建立された。		
第12回	平成23(2011)年 12月19日(月)	①モニュメントの名称を「若き医師たち」(仮称)とする。②キンストレーキ修理デジタルアーカイブは山本博教授のご尽力で9月に完成した。③式典・祝賀会の招待客の範囲を決定。④祝賀会では中庭にテントを張り立食形式を採用。アトラクションの予定なし。(実際には、記念祝賀会のアトラクションとして医学類学生のアカペラグループ「はもら内科」と、附属病院職員の「アンサンブル金沢大学附属病院」による演奏が披露された。)
第13回	平成24(2012)年 3月15日(木)	①祝賀会では中庭をテントで覆う。②招待客への記念品は「紅白饅頭」とする。③記念誌には記念式典の記事を加え10月発刊を目指す。
第14回	平成24(2012)年 4月23日(月)	山本健委員長就任。①委員会名を「金沢大学医学部創立150周年記念事業実行委員会」に変更。②記念モニュメント名を「医の源流未来への継承」(加藤聖十全同窓会理事長提案)に決定。③出席者への記念品として、キンストレーキ型USBフラッシュメモリーを提案。祝典までに納入可能であることが確認された。
第15回	平成24(2012)年 6月26日(火)	式典直前の委員会。祝賀会の開催要項確認、来賓対応などを確認。
平成24(2012)年7月7日(土)金沢大学医学部創立150周年記念式典、記念講演、モニュメント除幕式、記念祝賀会を挙行。		
第16回	平成25(2013)年 3月27日(水)	①非常勤職員の雇用延長、②寄附金の取り扱い、③ホームページの更新などを討議。

医学部記念館の風景



宝町キャンパス整備事業竣工を祝して

前金沢大学附属病院長

並木 幹夫 (昭和五十年大阪大学医学部卒業)

平成九年からスタートした金沢大学の大事業が足掛け二十年の時を経て完結しましたが、私が金沢大学に赴任し、在籍した二十年とほぼ重なり、感慨深いものがあります。

着工当時病院長であられた高島力先生が宝町キャンパス再開発予算化決定のニュースを知らされたのは、ゴルフ場でプレー中で、場内放送で呼び出され急遽大学に戻られたというお話をされていました。病棟の設計段階では、当時病院長の渡邊洋宇先生は、私のようにずけずけ意見を言う教授達の様々な要求を調整されるのに大変ご苦労されたことと思いま



写真1



写真2

す。当時、建物の間にある吹抜けスペース(光庭)がどういう意味があるのか分からず、文句をつけて渡邊先生を困らせてしまったことを、今さらながら反省しています。このお二人とも病院長ご退任後まもなくご逝去されてしまいました

が、病院長在任中のストレスが関係したのではないかと思います。その二代あとの病院長であられた小林健一先生は在任中の急逝で、まさに殉職ということが言えるかと思えます。小林先生は文部科学省との折衝などで東京に頻繁に出張されていましたが、息を切らしながら歩いていらつしやるのを羽田空港でよくお見掛

けしました。もちろん、河崎先生、三輪先生、利波先生、小泉先生そして富田先生という歴代の病院長のご尽力で新病棟、新中央診療棟、新外来診療棟が完成していったわけで、それぞれの病院長ならではの苦勞があったことと思います。

毎年発行されている金沢大学附属病院概要という小冊子の表紙は、最近では宝町キャンパスの航空写真が使用されています。平成十三年版(写真1)は完成した新病棟と古い病院建物が両方写っている貴重な写真です。平成二十七年版(写真2)は私が病院長在任中の写真ですが、新臨床研究棟(C棟)も完成し、建物建設は完結しましたが、駐車場が整備中だということが分かります。私が病院長の時は、この駐車場不足をどう乗り切るかということが、大きなテーマでした。少しでも空いたスペースがないか、少しでも有効利用できるスペースはないか病院敷地内を見て回りました。また、金沢美術工芸大学の駐車場を貸与していただ

英断

元金沢大学医薬保健学域長

山本 博 (昭和五十年卒業)

次ページのPDFは、平成十一年五月十五日発行の会報百十二号に寄せた編集後記である。写真右側に見える二階建ての建物が十全講堂。右後方にクレーンが頭を覗かせていることからわかるように、当時、新病棟の建設工事が本格化していた。もし、当初の案の如く、工事

き、金沢市には病院前の広見の利用にについても交渉するなど、事務の皆様には無理をお願いしてしまいました。そして、毎日病院長室から病院前の道路の混雑具合を見ながら、一喜一憂していました。私の病院長時代に苦勞したもう一つのこととは、苦しい病院財政でした。宝町キャンパス整備には巨額の資金が必要で、当然ながら大きな借金の返済が必要でしたが、私の在任期間はまさに返済金のピークでした。しかし、苦しい財政の中、職員一丸となつて頑張り、何とか乗り切ることが出来たことに對し、あらためて職員の皆様に感謝申し上げます。

宝町キャンパス整備事業完成とともに、私は病院を去ることになりましたが、この大事業を経験できたことは、苦勞も多かったですが大変幸運だったと思います。多くの皆様の夢を乗せて完成した新しい宝町キャンパスで、次世代の皆様が新たな金沢大学発展の歴史を築かれることを祈念いたしております。

用車両が薬学部とがん研の間、あるいは医学部と学生食堂・サークルハウスの間を通ることになっていたら、宝町キャンパスで学び働く学生・教職員の身体的精神的リスク・ストレスは想像を絶するほど大きなものになっていたであろう。教育・研究・診療の質に関しても、レベル

― 桜の木は残った ―

今春十全講堂前の桜を賞でることは、も
しかしたら、叶わぬかもしれぬことだった。
附属病院新築のための工事用車両を通すル
ートとして十全講堂前↓がん研・薬学部間
↓県道という案が当初有力で、その場合四
本中三本までを伐らなければ大型車両が通
れないと査定されたためである。十全講堂
前↓医学部・病院間↓野球グラウンド↓県
道というルートの可能性も併せて検討され
た。最大二分半に一台という頻度で廃材や
機材を載せたダンプカー等が往来すると推
定され、キャンパスの荒廃が危惧された。
学生たちの間にもやがて反対の気運がめば
えはじめた。

しかし、幸いなことに、桜の木は残り、
工事も予定通り順調に進んでいる。ルート
決定の刻限ぎりぎりに至り、講堂・記念館間↓薬学部裏↓県道という新案が打
ち出され、これが実現された。この結果、薬学部裏の樹木や薬品庫は姿を消さ
ざるを得なかったが、防護壁の向こうを工事用車両が盛んに往来していること
に気付かぬ人もいるほど、キャンパスの静けさが保たれるところとなった。本
ルートは安全性の面でも最善と考えられる。宝町地区部局長懇談会（中西前医
学部部長、高島前病院院長、渡邊現病院院長、二階堂薬学部部長、磨伊がん研究所長）の
炯眼と英断に敬意と謝意を表する次第である。写真は残った桜を今年の花盛り
頃に撮影したものである。同窓の諸兄姉には約一月遅れの花見を楽しんでいた
きたい。



年年歳歳花相似！今年花似去年好！（松平信一氏撮影）

を高めるどころか維持することさえ困難
をきわめたかもしれない。しかも、それ
は、十何年間もつづいたかもしれぬこと
であった。それを救ったのが、真に、当
時の部局長の先輩方の智慧も情けもある
配慮と決断であった。この結果、キャン
パスの安全と静謐を保ちつつ、また、教
育・研究・診療のアクティビティを損な
うことなく、再開発整備事業は計画どお
り上首尾に進行した。当時のことを思い

起こすと、リーダーシップを発揮された
五先生のうち渡邊先生、高島先生、磨伊
先生が泉下の客となられ寂しいことであ
るが、いまなお深い尊敬と感謝の念を抱
かずにはいられない。
一件落着の象徴のように残った四本の
桜であったが、残念なことに、老齢化が
進み、うち二本が垂切除されるところと
なった。平成二十四年六月のことであ
る。伐りとられ、廃材にされようとして

いた中から、枝を一本分けてもらい、茶
杓として残した。梢側が優先に来るよう
に削ったこともあり、手にすると、茶杓

平成二十二～二十三年度の状況

元金沢大学医薬保健学域長

井関 尚一（昭和五十一年東北大学医学部卒業）

平成二十二年度（二〇一〇年）四月に
医学部長となつて、医学部創立百五十周
年事業推進準備委員会の委員長を前職の
金子周一教授から引き継いだ時点で、前
年の十月から十全同窓会員を主な対象と
した寄附金の募集が開始されていた。医
学類ホームページに掲載された募金趣意
書には、予定する事業として①十全講
堂から正門までのメインプロムナード整
備、②医学部記念館改修、③医学部
百五十年史の編纂、④百五十周年記念
シンポジウムの開催、⑤百五十周年記
念式典の開催が掲げられていた。このう
ち百五十年史（後に百五十周年記念誌）
については、すでに山本博研究域長（当
時）を座長とするWGにより原稿募集が
進んでいた。推進準備委員会のメンバー
はすべて前年度からの留任であったた
め、私としては委員のご意見に全面的に
依存する形で、平成二十三年度末まで合
計六回開催した推進準備委員会において
肅々と計画を実行に移す決定をしたのみ
である。また中村信一学長（当時）や十
全同窓会理事の皆様との連絡を密にし、
私が理事会等でご報告するほか、合同会
議を設けてご意見を計画に反映したこと
もあった。

の彼方に宝町キャンパスの空が感じられ
る。それはいつも静かで高い。僭越なが
ら、銘を「十全校」とさせていただいた。

最初の推進準備委員会においては、巨
額の費用がかかるメインプロムナード整
備や記念館改修は募金事業の成果次第で
検討することとし、正門付近の整備以外
はひとまず棚上げにした。代わりに確実
に後世に残る事業として、キャンパス内
に設置する記念モニュメントの制作が決
定された。内容を金沢市医師会が所蔵す
る明治の金沢医学館第一期生九名の集合
写真に基づく群像とすることはすぐに決
まった。制作は、当時進められていた金
沢美大との連携の目玉とすべく、山本
域長の仲介により同大学の石田陽介教授
にお願ひすることになった。モニュメン
トの名称を「医の源流、未来への継承」
と決めたのはずつと後、平成二十三年度
末（二〇一二年三月）になってからで、
加藤聖同窓会理事長（当時）の発案によ
るものである。さらに、当時全学では中
村学長のもとで創基百五十周年記念事業の
計画が進められており、彦三の加賀藩種
痘所跡地に金沢大学発祥の地の石碑が建
立されることになった。そこで推進準備
委員会としては、医学部の歴史において
もうひとつの重要な場所である金沢医学
館跡地（現在金沢市医師会館敷地）にも
石碑を建てることにし、医師会や金沢市

に打診することになった。これは私の発案だったと思うが、確信はない。そのほか、国宝修理所によるキンストレーキの解体修理が行われた際の膨大なビデオ画像にキャプションやナレーションをつけてDVDのアーカイブとし、百五十周年記念誌の付録とすることが新たな事業として決まり、これの作成指揮も山本域長をお願いすることになった。

記念式典については、全学の創基百五十周年記念式典が平成二十四年五月に予定されており、当初はこの全学の式典の一部に医学部の式典を組み込むという案もあったが、大学発祥の中心であった医学部の存在が全学の式典の中では埋没する恐れや、何より十全同窓会の皆様のお気持ちを考え、全学の式典とは別に医学部独自の式典を行うことが望ましいと考えた。十全医学会（当時井上正樹会長）との共催により同医学会のシンポジウムと創立百五十周年記念シンポジウムとをジョイントで行うことが先に決まったので、さらに同窓会とも相談した結果、十全同窓会総会、百五十周年記念シンポジウム（兼、十全医学会シンポジウム）と記念式典（祝賀会含む）をすべて同日の平成二十四年七月七日、宝町キャンパスで行うことが、平成二十二年度末（二〇一一年三月）に決定された。以後、シンポジウムについては十全医学会と推進準備委員会の共同で計画を進め、特別講演の演者を本庶佑氏と安藤忠雄氏に決定したのが平成二十三年六月であった。記念式典では当日までに設置予定のモニメントの除幕が重要なイベントとなった。梅雨時の開催ではあるが、昭和元年の旧制金沢医科大学開学記念祝賀会

の例に倣い、医学類の教育棟と中庭のテントで祝賀会を行うことになった。

私が発案したと記憶しているものとしては、現在教育棟二階に展示してある医学部百五十周年の歴史パネルがある。平成二十三年秋に角間の資料館で行われた「金大始め」で使われたパネルを譲り受けたほか、山本域長の作成になる追加パネル（記念誌編集WGの職員が尽力してくれた）を合わせて平成二十四年中に展示し、そのまま常設展示になって現在に至る。

平成二十三年度末（二〇一二年三月）をもって委員長を退き、後任の山本健医学類長にバトンタッチしたが、その年の七月に行われる記念式典等への道筋をほぼつけることができ、ほっとした。残された課題はメインプロムナード整備と医学部記念館改修であったが、幸いなことに、その後私が域長の時代にこれらの事業が国の補助の対象となり、平成二十六年度に二億円の予算が措置された。これに百五十周年寄附金の一部と十全同窓会からの寄附、計一億円を加えて、当初の百五十周年記念事業の目標をすべて達成することができた。国の補助がついたのは、全学の施設部が概算要求において工夫を凝らして尽力してくださったことのほか、何よりも同窓会のおかげで自己資金があったこと、さらに金沢市による遊歩道建設など、行政との協力が国から評価された結果である。

私は本学の卒業ではないが、本学に赴任して三十年にもなる。今年度で定年退職であるが、過去十年ほどの間に医学類教育棟・基礎棟、新臨床研究棟（C棟）、医学図書館、医学類福利施設棟な

どの改修や新築が次々と行われ、今回創立百五十周年記念事業の掉尾を飾る医学部記念館改修、メインプロムナード整備、医学類正門の移転復元がなった。これと並行して進められた病院の新外来棟建設、駐車場建設、病院正門復元を含む附属病院環境整備事業もほぼ同時に完成

二十一世紀の医学、医療を創造する宝町新キャンパス

金沢大学医学類長
多久和 陽

（昭和五十四年東京大学医学部卒業）

この度、宝町キャンパス整備事業竣工特集号にキャンパス整備について、医学系長・医学類長として寄稿する機会を頂戴しましたので、この機会に平成十年の附属病院新病棟完成にさかのぼって宝町キャンパス整備事業を振り返り、記録しておきたいと思います。この小文をまとめるに当たり、医学類創立百五十周年記念誌および過去の十全同窓会報掲載記事を参考にさせていただきました。

宝町キャンパス再開発は、平成十年の附属病院病棟建て替え工事の着手をもって開始されました。附属病院の建造物は、昭和三十年代の第三病棟および中央診療棟、四十年代の外来診療・管理棟、五十

年代の外来診療棟および西外来診療棟の増改築を重ねました（写真1（病院改修前の平成ヒトケタ年代の附属病院および医学部キャンパス建造物の全景航空写真）。大学病院としての機能維持、向上を図るために、平成七年（一九九五）には附属病院将来計画検討委員会において

し、宝町キャンパスは私が赴任した昭和六十一年当時と比較して見違えるような変貌を遂げた。在職中にこれを見届けることができたのは感無量である。二年間の委員長在任中に創立百五十周年記念事業に僅かでも貢献できたのなら幸いです。

「医学部附属病院再開発計画―基本構想」が、また医学部局将来構想委員会において「宝町団地開発計画―基本構想」がそれぞれ策定されました。この計画に基づいて、平成十年に着工した新病棟建設は、東病棟が平成十二年（二〇〇〇）に、西病棟が平成十三年に完成しました。引き続き、平成十七年には新中央診療棟が、平成二十年に新外来棟が竣工し、十年間にわたって進められてきた金沢大学附属病院の整備が完了し、新病院が生まれしました。竣工を記念し、平成二十一年四月二十五日に、附属病院一階ホスピタルプロムナードにおいて完成記念式典が挙行されました。

一方、医学部研究棟・教育棟の建造物は、昭和四十二年の旧北研究棟の新築完成を皮切りに、解剖関係（解剖学、病理学、法医学）特殊棟、旧南研究棟、南棟と北棟をつなぐ中央施設棟（講義棟）ならびに臨床講義棟が昭和四十六年までに竣工しました。附属病院の建て替えがほ

しました。

ぽ完了した後、旧薬学部棟および旧がん研究所棟の有効活用、ならびに老朽化が目立つようになった医学部既存施設の整備が計画され、文部科学省から選定された宝町地区総合研究棟改修施設整備等事業(PFI: Private Financial Initiative 事業)が平成十七年に開始されました。

まず、十全講堂の改修、新解剖棟(G棟)新築が完了し、平成十八年三月三十一日に落成式が挙行されました。G棟は旧解剖棟の南側に二階建ての建物が新築され、解剖実習室(二階)、法医解剖室(一階)が配置され、ホルムアルデヒドなどの化学物質の除去に優れた換気設備が整備されています。G棟にはこの他、主に第三学年、第四学年が使用する第三・第四講義室(二階)、医学類動物飼育室(一階)が配置されています。十全講堂の改修においては、大講堂の椅子はすべてシアー形式のものに取り換え、一階床はバリアフリーとなりました。また、同年六月には、旧薬学部の改修が完了し、A棟(十全講堂と並行する建物)およびこれに直交するB棟(旧がん研究所と並行する建物)として生まれかわりました。旧がん研究所も内部の改修が行われ、D棟となりました。PFI事業は順調に進展し、同年中にはE棟(旧北棟)の改修が完了、さらに平成一九年(二〇〇七)十一月末に教育棟(旧中央施設棟)およびF棟(旧南棟)の改修工事が完了しました。E棟、F棟には医学系の基礎系教室のほとんどが入り、教育棟一階には第一及び第二講義室、二階には実習室、少人数学習室が配置されています。また、臨床研究棟(C棟)の建て替えが平成二十二年に開始し、平成二十六年に完了

は、老朽化が進んでいました。概算要求により予算が措置され平成二十三年末に大改修が開始し、平成二十五年三月十四日に新図書館が開館し、同日に記念式典が催されました。図書館の増改築、内部設備には、十全同窓会より三千万円の御寄附をいただきました。これを記念して、二回の集會室は「十全記念スタジオ」、貴重資料室は「十全記念」と冠しました。

医学部記念館は大正五年(一九一六)に金沢医学専門学校開校二十五周年記念事業として同窓生により建設され、昭和四十七年(一九七二)には改築が行われました。同年八月二十日に、金沢大学医学部百年史出版記念とあわせ、記念祝賀会が開催されています。記念館は各種の会議や講演会、記念式などに利用されているほか、資料室には我が国における医学教育の黎明期、旧医学専門学校、医科大学時代の貴重な資料が保管、展示されてきました。平成二十四年(二〇一二)に迎えた金沢大学医学部創立百五十周年を記念して、医学部記念館の改修事業、十全講堂から正門までのメインプロムナード整備事業が計画されました。この二つの事業には、平成二十五年度政府補正予算二億円が措置され、百五十周年記念募金と十全同窓会からの寄附計一億円と合わせた約三億円が充てられました。医学部記念館の改修は平成二十七年六月に完了し、一階の展示室および二階の多目的ホールは全面的に内装が一新されました。展示室は、天井、壁面、床面をシックかつモダンな色調とし、LEDダウンライトとスポットライトによる



写真1

照明装置を設置しました。また、老朽化していた展示室内のショーケースを一新し、これにかかる約二千万円の費用も十全同窓会からご寄附をいただきました。また、キンストレーキ展示用ケースも一新し、その費用四百九十三万五千円も十全同窓会からご寄附をいただきました。二階の多目的ホールは照明、オーディオ機器を更新し、一階と二階に学生・若手教員用の教育研究スペースを新設しました。プロムナードは十全講堂玄関から市道の方向に向かって真っすぐに伸びる幅広い樺並木の遊歩道で、メモリアルプロムナード「医学の道」として宝町キャンパスのシンボリックな景観となつていきます。また、宝町キャンパス敷地と市道の



写真2

境界に沿った遊歩道が金沢市によって整備され、現在工事が進行しています。

宝町キャンパス整備事業は、平成二十八年六月のメインプロムナードならびに病院敷地の正門、外来棟前の駐車場、バス・タクシ乗降場の整備完了をもって、すべて完成をみました(写真2(平成二十八年六月以降の宝町キャンパス全景航空写真)。百五十周年記念事業の完成を祝う記念式典が、馳文部科学大臣、石川県および金沢市からの来賓を迎え平成二十八年七月二日に医学類キャンパスでとり行われました。

医学類プロムナードの完成をもつて、宝町キャンパス再開発整備事業が完了し、教育、診療、研究の施設が一新され

ました。施設が一新されたこの新しい医学類キャンパスにおいて、諸先輩の築かれた伝統の上に、日本、そして世界を先導する二十一世紀の医学・医療を創造することが私たちの使命と考えております。世界水準の医療者・研究者として医

学・医療の進歩に貢献するとともに、これからの医療、医学研究、行政の各方面におけるリーダーとして活躍する人材の育成に、これまで以上に真摯に熱意を持って取り組んでまいります。

予期せぬ整備事業の効用

金沢大学医薬保健学域長

金子 周一 (昭和五十七年卒業)

平成九年から事業が開始されているが、それ以前から宝町キャンパスの整備について議論が行われ、計画がすすめられていた。昭和六十二年のこと、米国学中の私のもとに、服部信病院長から米国立衛生研究所 (NIH) の病院の設計図を手に入れてほしいという依頼があった。若輩の留学生には大変であったが上司の手を借りて設計図をお送りした。新病院の設計で何度も図面を見せられた。平成八年、助教授に昇任した私のところに、高島病院長から新築となった黒部市民病院の視察に行くように指示があった。看護師、事務の方と訪問することとなり、黒部市民病院の高松病院長に施設を紹介していただいた。

私がまだ若い頃で、事業が開始される前でも、こんな状態であった。その後、これだけ長きにわたる整備事業となると、本当にたくさんの皆さんが、外来棟、病棟、中央診療棟、駐車場、キャンパス整備に関係されたのではないだろうか。それが重要な会議であれ、小さな会議であれ、自分の関係する部署の設計や使用

法であれ、皆さんが、時間を使って協力しあつて事業を進めてこられたように思う。外来の診療室の配置や広さ、中央診療部の配置、研究棟の面積や場所では臨床の先生の侃々諤々の議論がなされ、教室に帰ってきてからも設計図を前に熱く語った日々を思い出す。同じ場所を使用しながら新しいものを建てる、改築するというのは実に時間がかかることであったが、皆さんに協力していただいた結果、以前の施設とは大きく変わって良くなった。

事業が開始されてから教授になり、医学類長を四年間、研究科長、医学系長を二年間、そして今の域長をさせていただいている。医学部創立百五十周年の事業も重なって、教員の方からの寄附額を決めること、その寄附金で何のキャンパス整備事業に貢献するのかといった議論をした。寄附額を予定しなければ、何ができるかも決まらない中で、総論賛成、各論反対の議論が先生方から出された。当時は大変であったが、今となれば実に楽しい思い出となった。中村学長と富田病

院長の少しでも良い整備をしようとされる行動力には、人として大いに勉強をさせていただいた。たまたま、その時に役職についていた関係で、平成二十六年の医学系臨床研究棟の竣工記念式典では森元総理らをお招きし、開会の式辞を仰せつかった。また、医学類の門柱に掲げる看板に「金沢大学医薬保健学域 医学類」と揮毫させていただいた。私の文字が長く残るのかと思うと、なんとも光栄であった。同時に、これまで多大なご努力をされた先生方を存じ上げているだけに、なんだか申し訳ない気持ちを抱いた。

た。それは、それほど立派な病院になり、美しいキャンパスで、人々が褒めたたえているから、ご自身も誇らしく嬉しく思っておられるのに違いなかった。そうしてみると、まったく新しくどこかの土地に建物ができて、さっと移るよりも、同じ場所での scrap and build も良いところがあった。長きにわたったおかげで、自分が関わった、時間を使った、努力したと感じている人が多いのは、良い整備が行われただけでなく、金沢大学への愛着となった。おひとりおひとりの協力がなければ出来なかったのである。私には予期できなかったことであるが、世代を超えて多様な意見が詰まったこの整備事業は、それだけでも大成功に思える。整備された様子を見ると、そのまま金沢大学医学類、大学院、附属病院のこれからの発展があるような気がして、実に嬉しい気持ちがする。皆さまに心より感謝申し上げます。



金沢大学附属病院再開発事業完成によせて

金沢大学附属病院長

蒲田 敏文（昭和五十八年卒業）

私は、平成二十八年四月に金沢大学附属病院長に就任しました。附属病院が立地する宝町キャンパスの再開発事業は平成七年に新・金沢大学附属病院基本構想案が決定され、平成十年十二月から病棟新築工事が開始されました。Ⅰ期工事として北病棟と東病棟が平成十二年十二月に、Ⅱ期工事として西病棟が平成十三年六月に完成いたしました。その後、旧病棟と旧外来棟の取り壊しと並行して新しい中央診療棟と外来診療棟の建設に着手しました。長い工事期間を経て、中央診療棟は平成十六年十二月に、外来診療棟は平成二十年十二月に完成しました。したがって、病院の建物自体の工事の完成に十年かかったことになりました。

私は、昭和五十八年に金沢大学医学部を卒業し、昭和六十三年から現在まで附属病院に勤務してきましたので、この再開発工事とともに歩んできたなど思っています。毎日附属病院に出動していた私は正直いつになったら完成するのだろうと工事完成を心待ちにしていたので、平成二十年四月二十五日に行われた



富田病院長主催の新・金沢大学病院完成の記念式典・祝賀会で新しくなった附属病院外来プロムナードをみてその素晴らしさに感激したことを今でもはつきりと

覚えています。

新病院の完成後は外来駐車場の整備工事が始まりました。平成二十四年五月には立体駐車場が完成しました。工事期間中は工事車両からの騒音と駐車スペースが減少したために生じた車の大渋滞で近隣住民の皆様と患者さんには多大なご迷惑をおかけしましたことを、この紙面をお借りして深くお詫び申し上げます。

新病院完成後八年間の工事期間を経て平成二十八年六月末に病院駐車場も完成し、十八年という長い年月を要した金沢大学附属病院再開発事業は無事終了いたしました。七月二日（土）には医学類プロムナード完成式展の後、附属病院環境整備（駐車場）完成式が開催されました。完成式には馳浩文部科学大臣、山崎光悦学長、竹中博康県副知事、細田大造金沢副市長、上田博典医師会副会長、安田健二金沢市医師会会長をはじめ多数の関係者の皆様のご臨席を頂きました。当日は快晴で、病院の看板の上には工事完成を祝うかのように珍しい「くじら雲」が浮かんでいました。きれいになった病院と外来駐車場を沢山の方にお披露目することができてほんとうによかったと思います。

私の恩師（前々放射線科教授）である故高島力名誉教授が病院長在任中に再開発工事がスタートし、弟子の私が病院長に就任した年に外来駐車場を含めて全ての工事が完了したことは、とても感慨深いものがあります。あらためて再開発事業計画と遂行のためにご尽力頂いた歴代の金沢大学学長、理事、病院長の先生方をはじめとしてすべての関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。





写真1 D棟、1-3階を先進予防医学研究科として使用

金沢大学医学類D棟の 全面改修と大学院先進予防医学研究科

金沢大学大学院先進予防医学研究科長

中村 裕之 (昭和六十年卒業)

金沢大学医学類D棟が、がん研究所を大規模改修し、総合研究棟の施設として平成二十六年に完成しました。その姿は、改修というより新築されたぐらいすっきり様変わりしました (写真1)。このD棟のお陰で現在の先進予防医学研究科の教育研究体制が成り立っていると云っても過言ありません。先進予防医学研究科は金沢大学前学長の中村信一先生のご尽力により平成二十四年度文部科学省国立大学改革強化推進事業「真の疾患予防を目指したスーパー予防医学に関する三大学 (千葉・金沢・長崎) 革新予防医科

学共同大学院の設置」に採択され、この度、平成二十八年四月に無事に開講しましたが (写真2)、その間、この新しい研究科を実質的にどここの場所に設置しようかと大いに悩んでいました。平成二十五年には中村学長や同時の医学系研究科長の山本博教授 (現金沢大学理事・副学長) から、四つの分野 (革新ゲノム情報学、包括的代謝学、免疫生体防御学、国際保健学) の新設を提示して頂き、ちょうど組織の概略が見えはじめ、先進予防医学研究科に所属する専任教員が計二十二分野にもわたることがわかり、その教育研究活動を担保するためには、膨大なスペースを確保する必要があったからです。金沢大学はこの三大学共同大学院の実質的な主管校であるため、担当教員や学生収容定員も三学で一番大きい (金沢大学は四十八人、他の二大学は四十人) ことや、今後の三大学の共同運営における中心となるための拠点が必要だった訳です。その時、中村学長と山本博研究科長のご尽力のお陰でD棟の全面改修が文部科学省によって認められ、さらにはそこでの共同大学院の新分野の設置を当時の古川俊理事・副学長からご提案して頂いたのは、本当に幸運の一言では尽きないぐらいの大きな転機でした。今では、一階に次世代シークエンサーを三台、他にもセルソーターなどの最先端



写真2 先進予防医学研究科の看板除幕式、平成二十八年四月十九日、金沢大学医学類F棟玄関前右から、山崎光悦学長、柴田正良理事・副学長 (教育担当)、山本博理事・副学長 (国際・附属病院・同窓会担当)、金子周一医薬保健研究域長、筆者

宝町キャンパス整備事業竣工によせて

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科長
堀 修 (平成元年大阪大学医学部卒業)

この度、宝町キャンパス整備事業竣工を迎えるにあたり、一言ご挨拶を述べさせていただきます。まずは、この約二十年に及ぶ壮大な事業を成し遂げ、大変素晴らしい新宝町キャンパスを構築していただいたことに対して、心より御礼申し上げます。陣頭指揮をとられた歴代の医学部長・医学系長・医学類長、及び病院長の先生方、様々な形で本事業をサポートしていただいた学長先生をはじめ、域長、研究科長、十全同窓会会長、理事長

の諸先生方、更には本事業に尽力されたすべての皆様に最大限の感謝を申し上げます。今回の事業により、宝町キャンパス内にある病院、基礎・臨床研究棟、解剖実習棟を含む教育棟、十全講堂、図書館、医学部記念館、福利施設等、すべての施設が改修、又は新設され、基礎と臨床研究棟とつながるスペースには立派なプロムナードが作られました。私たちは今、これまでに無いほどに恵まれた教育・研究・診療環境の中でそれぞれの業務や勉

の機器を揃え、三階には、Black boardという遠隔教育システムを備えた新しい研究科に相応しい門出をすることができました。また現在、先進予防医学研究科の研究センターとして個別化予防を可能にし、その研究成果を世界展開する戦略を主軸とした研究活動を行う先進予防医学研究センターを立ち上げたところで。先進予防医学研究科の設置に向け、誠心誠意ご尽力頂きました金沢大学の多くの関係者、また十全同窓会の諸先生方にはD棟での教育活動を可能にして頂きましたことを含め、ここに厚く御礼申し上げますとともに、この新しい研究科へのご理解を益々頂き、今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

学に励むことができるようになり、大きな喜びを感じております。一方で、立派な施設に恥じない良い仕事をしなければならぬ、という責任もひしひしと感じ、まさに身の引き締まる思いです。本事業が完成するまでには、おそらく、数多くの課題や困難があったものと推察いたします。それらにひるむことなく一つ一つ解決され、更に、オリンピックでの日本の陸上リレーチームの様に、ミスのないパトンさばきで長期間にわたり、着実に事業を進展させた結果と感服しております。

私自身は平成十一年に助手として本学医学部に着任し、以来、助教授・准教授、そして平成二十一年から教授としてお世話になっております。従いまして、本事業の発案及び実施にはほとんど尽力出来ておりませんが、一教員として本事業の進捗を肌で感じて参りました。例えば、当初、私どもの教室解剖学第三は北棟二階にあり、冬の寒さはなかなかチャレンジングなものでした。平日十六時ごろまでは非常に強力なボイラーのおかげで暖かく過ごせたのですが、夜間、或いは週末は油断すると実験室の室温が下がり、DMSO、或いはSDSなどと言う日常よく使う試薬が凍ってしまい、使用のために温めておりました。それが、平成十八年にE棟（旧北棟）の改修が終了し、新しくなった三階の教室に移った際には、実験室のエアコン設備が充実して、常に室温が十八℃以上に保てることに大変感動いたしました。以後、季節に関わらず快適な環境下で研究を行うことが出来るようになった次第です。

また、平成二十二年から四年間は学生



支援委員長をさせて頂き、学類長の先生と医学類学生の学習環境についていろいろ相談したり、学生からの要望に応えたりして参りました。その中で、グループ学習ができる小部屋や試験前の学生達から強く出されておりました。本事業により、教育棟、図書館、更に福利施設にもそのような勉強スペースが多数設置され、学生が自ら求めて学習する、いわゆる能動的学習の場としても大いに役立っていると感じております。また、図書館に関しても、最近では電子ジャーナルの普及により、以前に比べて図書館内で論文を検索したり、読書をする機会は減少したかのように思われます。しかし、一方で、学生が自ら情報収集を行ったり、集めて勉強したりする場、すなわちラーニングコモンズとしての役割は増加してきたかと思えます。今回の図書館改修にあたり、十全同窓会からも多大なご支援をいただいたとお聞きしております。おかげ

さまで、グループ学習用のスペース、パソコン、セミナールームが非常に充実し、無線LANも整備されました。中でも二階に完成した十全記念スタジオはスペース的にも機能的にも非常に使いやすく、私たちも頻繁にセミナールームなどで使わせていただいております。

繰り返しになりますが、本事業により、宝町キャンパスにおける臨床、研究、教育すべての環境が整備されたと実感しております。これだけの施設が出来上がつた今、私どもの使命は、この施設を十分活用して、より良い研究、教育、診療を提供し、「金沢大学ここにあり」と言われるような仕事を一つでも多くなすことかと感じております。そして、その後、パトンを次の世代に確実に渡すことこそが、これまで金沢大学が培ってきた伝統そのものであり、先輩方の志に報いることかと考える次第です。十全同窓会の皆様におかれましては、これまでも増しのご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



編集後記

平成十年に新病棟の工事が開始されてから、十八年の長きにわたった宝町キャンパスの整備事業がようやく終了いたしました。順次改修・更新されていきましたが、最終盤に旧臨床研究棟を取り壊される段になり、長年過ごした場所がなくなることに寂しさを感じました。昭和六十一年卒業の私ですらそのような感慨を持ちますので、諸先輩方はいかほどの寂寥感をお感じになられるであろうかと思えます。しかし、この特集号を読み、生まれ変わったキャンパスを眺めると、この地には建物が変化しても変わることのない先輩方の知恵と愛情が詰まっていることに気づかれます。

私はあと十年ほどこのキャンパスで過ごすことになるのだと思います。次第にこの新しいキャンパスの風景が周囲に溶け込み、この界限にこの姿で昔から存在していたかのごとく感じられるようになるでしょう。地域の方々に親しみを感じていただくと同時に、遠方からられる方々が口をそろえて「立派な病院ですね」と言われるがごとく、高度医療の象徴として存在し続けることと思えます。

本特集号作成に当たっては、歴代の医学部長、医学類長、医学保健研究域長、医学系長、医学科長、附属病院長、十全同窓会長、十全同窓会理事長等の役職でキャンパス整備に関与された方々にご寄稿をお願いいたしました。望ましくは、すべての同窓会会員に寄稿をお問いがけすべきところではありましたが、紙面の限りがありまして、ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

本特集号が、金沢大学宝町キャンパスで過ごされたすべての方々の楽しみとなるとともに、後世の記録となることを祈念いたします。

十全同窓会会報編集委員会委員長

絹谷 清剛

会報 105 号 (平成 9.1.16)

病院長

金沢大学で開町団地再開発計画は、その基本構想が平成七年十二月に医療部部長佐々木孝典氏会で策定され、宮崎前病院が文部省医学教育課をはじめとする関係部局に説明を開始したのがこの目玉をみたしめであります。すなわち平成八年六月二十八日の第五十六回金沢大学評議会で全学の合意を得た後、病院再開発を中心として具体的行動を起こしていくという形で、平成九年度の概算要求という運びになりました。その内容は先ず病院再開発の中心で病棟より一階と二階に分けて工事を始め、その後クラフ・アンド・ビルド方式で逐次中央診療棟、外来棟を完成させていくという案で、まず理化学文化財と地質調査が行われる予定であります。

以上が大学病院再開発計画の経緯ですが、文教速報第五五〇号（平成八年九月十三日）の「先端医療に対応した大学病院の整備」という項目中に金沢大病棟という名前を見つけた時の感激は小生一生の中で最大のもののであります。

現在掲げている基本理念は、*patient*, *teacher*, *Hospitalist*, *Bariatrician* という四つのキーワードです。高齢者：その病院にやってくる。若者：その病院にやってくる。病める人が訪れる。易い人間との医療を提供する各診療科であることが研病院。院内各診療科・基礎医学・保健衛生・薬学部・地域医療機関等とのボランタリーを旨とする病院と理解していただきたい。

具体的に外は患者をへる個室別室門科診療科目の標示もあて隔らさずにない方への総合診療部の受診をお勧めすることであり、それに対応した病床配分も考えられています。こうした方向は先に述べた再開発を達成した大卒病院にて見られるものであり、今後なくては五十年以上は利用していかなければならぬような病院であるということを示されるべきではありません。

次に教育面でも臨床代といわれつつある現在、若い研修医の場を盛じて積極的に行うことになることを望みます。大学病院の使命として、診療・教育・研究という三柱から成り立っている三本柱に新しく研究が求められる

ていること、昨今という高頻度稼働率の保持を迫るものとする気は毛頭ありませんが、高度先端医療の提供に、中核的臨床研究拠点 COE (Center of Excellence) としての行動は怠るべきでないと考えています。

二、これまでより着くことができた今、宮崎前副院長をはじめとする歴代院長や事務部長の方々にお礼を申し上げる共に、更なる御後援を得て、「二十世紀に相応しい新病院、そして新学舎」と題して成長していくことを信じております。

近年、宝町キャンパスにおける自動車の駐車台数は増加の一途を辿り、収容能力をはるかに超える状況にあります。

としての良質な環境の確保と火災等の緊急事態への対処等、平成八年九月一日から、ゲート方式による終日の駐車規制を実施することになりました。従来の駐車規制との主な変更点は次のとおりです。

本キャパを訪問される全同窓会諸兄には、種々ご迷惑をおかけすることと思いますが、規制の趣旨をご理解いただき、協力くださるようお願いいたします。

一、整理方法

自動料金精算機・ゲート方式による二四時間体制の駐車整理
(従来は、整理員による七時から一九時までの駐車整理)
二、駐車場の区分

病院正門ゲート

……外来患者専用駐車場

医学部正門ゲート

本キヤノンを方引き

合は、医学部正門ゲートか

入ってください。

三、入構整理料

従来と変更はありません。

- ・三〇分まで無料

三つ分走の一回目

・一時間を超えたときは、

間毎に一〇〇円及び消費

加算

四 入構整理料の特例措置

医学部グランド

環狀道路へ害愛

金沢市小立野台地を横断する都市計画道路「小立野・鈴見線」が中環状道路と位置づけられ、二〇・四メートルの幅員として右引二丁目から鈴見台一丁目までの区間二八〇メートルの拡張工事が行われる。この路線は医学部グラウンド・薬学部薬草園の横の金沢・井ノ口線を拡張し、石引一丁目交差点から鈴見台一丁目交差点まで、台地の高高低差を部分的掘削構造（トレンチ）で調整して、高架構造で結ぶ道路であり、

このために、医学部付属診療所が三
三三米にわたって道路用地に割愛
されるものである（図）。

この路線はもとより昭和四十七年
に二車線一六〇として計画されてい
たが、昭和六十一年に鈴見台で外環状
線と連結するために二〇・四車線
に変更されたことも医学部がある。
いずれにしても医学部グラウンド・
薬学部薬学草園が大幅に割愛されるこ
とから、医学部においては平成元年

う案（河崎案）が提示されたが、十一月に都市計画道路対策検討委員会が設置され、計画道路の妥当性及び補償問題等について検討を重ねた。とくに宝町団地再開発計画との整合性を、薬草園、クロタツ・アカタツ・モミの木（二四本）樹齡八十年以上の並木が消滅してしまうことから自然・環境保護について懸念が多かった。平成五年四月、同委員会からグラッド角からトンネルにしていう案（河崎案）が提示されたが、

建設道路の拡張用地買収が困難であり、基本設計変更はできなかった。そのため十回にわたる委員会で検討の末、図のようにグランドの機能補償、テナントの整備補償等の要望を要求し、平成八年十二月医療部教授として平成八年十一月学位が承授会において医学部グラント創設が承認され、直ちに県当局による整備事業が開始された（写真）。モミの木については金沢市の要望もあり、大木を移植する予定で根回しがなされる

た（写真）。医学部保健学科との橋渡し
歩道については中村屋横交差点に横断
号が、また薬部入口前は六米幅路、
橋がかけられ、インターロッキング
舗装して安全をはかることになって
いる。グラウンドの完成は平成九年三
月末、道路の完成供用は平成一九年
に予定されている。

(文責) 中西功夫

道路補償で
テニスコート新装オープン

め、医学部グラウンドならびに薬学部薬草園が一部割愛されることになったが、その代替えとして、テニスコートが整備された。去る四月十七日、新装成ったコートに中西医学部長・山本生活委員長・小泉テニス部長が出席してオープニング試合が挙行された。

会報 108 号 (平成 10.1.16)

医学部附属病院再開発

病院長 高島 力

施設計画

医学部附属病院再開発は、平成八年六月に評議会において「宝町地区再開発計画(施設基本構想)」の了承を得、文部省へ概要要求しました。その後、施設部が窓口となり文部省の関係部署と建物面積など種々協議を重ねた結果、九年九月に文部省国立学校施設計画連絡協議会において「医学部附属病院施設長期計画」が認められました。

建物面積は、先導的高度医療が可能なスペース、患者療養環境の向上、医療人教育スペースの確保など基準面積以外の特別面積を要求した結果、厳しい財政事情ながら現有面積の約一・三倍が確保できました。

施設計画は「基本構想」の考え方を反映させるため、病院建築専門委員会(下部組織として八つのワーキンググループ)設置、病院再開発計画検討委員会、科長会などで御意見を頂き検討を重ね、できる限り打ち合わせ回数を多くお互いの見解を確かめ、意志の疎通を図りました。また、臨床各部・科とも数回にわたってヒアリングを行って、その意向も広く取り入れながら詳細な実施設計を行ってきました。

①教育スペース施設計画の概要

①医学部医学科・保健学科、薬学部学生などの臨床実習のための教育スペースが必要になります。特に医学部医学科においては、六年一貫教育が導入され早期臨床教育が行われており病棟における実習生ロッカー室、二階から一〇階まで各フロアごとにカンファランスルーム(約六五平方メートル、二室に可動間仕切り可能)を設置します。

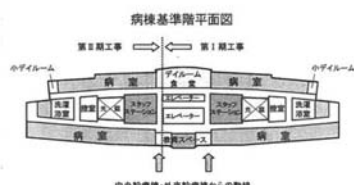


②患者療養スペース施設計画の概要
①患者の快適性、利便性、プライバシーを配慮し、施設のバリアフリー化を図ります。病室は一居室、四居室を基本とし病室内にトイレを設置します。②一居室の部屋数は現行の一七四室から二四三室に増加します。③フロアごとにデイルーム・食堂を設置し、給食はその場で対面盛り付けを実施します。④休息用の小デイルームを各フロアごとに二室(基本)設置します。

今後は、中央診療棟及び外来診療棟の施設計画について検討を続けていくこととなります。これからの医学・医療の発展を視野に入れ、病院再開発計画の完結と宝町医務部局将来構想の実現を目指していく先鞭を務める病院再開発計画を御紹介致しました。

新病棟の建設場所は第六病棟と看護婦宿舎の間にある東西に約一四〇メートル南北に約七〇メートルの土地を利用し、一般病棟は地階一階・地上二〇階建(免震構造)、精神科病棟は別棟の二階建(耐震構造)で合計の延面積は約四万平方メートルの壮大な規模になります。

③診療スペース施設計画の概要
①がん研究所附属病院と本院を病棟Ⅰ期完成時(十二年度)に統合し、病床数は七九二床から八三三床になります。②医師と患者の関係においては、相互理解を基礎とした医療の推進を図るため、一看護単位(基本五〇床)ごとに面談室を設置します。③医師同志の関連では、診



会報 109 号 (平成 10.5.1)

病棟新営工事起工式開催



去る三月二十三日(月)、本学宝町地区開発事業の第一歩として、病棟新営第一期工事の安全祈願祭が午前十時より第六病棟裏の建築現場に於いて行われました。

出席し、岡田学長、高島病院院長の挨拶に続いて文部省・岡山大学施設部長、藤井石川県厚生部長より祝辞があり、中西医学部長の乾杯で祝祭が開かれた。約一時間の歓談の後、渡辺次期病院長の音頭で万歳を三唱し閉会となった。

新営病棟は第一期工事が平成十二年度まで、第二期工事が平成十四年度までと今後五年間に亘って施工の予定であり、北陸の拠点病院としての医療への貢献が期待される。

(文責 佐藤 保)

会報 108 号 (平成 10.1.16)

病院再開発に伴う宝町キャンパスの駐車場の状況について



宝町キャンパスには、患者用駐車場三五八台分と教職員・学生用駐車場一〇八七台分が確保されています。したが、平成九年度末から医学部附属病院の病棟建築工事が着工される関係から、九年九月中旬から建築予定地(第六病棟裏)で実施されています。

この対応について非常に苦慮しているところであり、その対策として、現在自動車通学・通学をしている者に対し、真に通勤・通学に自動車を使用しなければならぬ場合以外、公共の交通機関等を利用するよう強い自主規制を行うこととなりました。

みなさんには、大変不便をお掛けすることになりますが、お互いの協力によりこの難しい事態を乗り切りたいと考えていますので、より一層のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

理蔵文化財調査及び十一月上旬から建築工事に伴う電気配線・給排水管等の引き直し工事が看護婦宿舎を中心として実施されたことにより、教職員・学生用の駐車場が約三五一台分使用できないこととなり、平成十年度からの本格工事の開始により、旧デニスコート駐車場を含め約一〇七台分の教職員・学生用の駐車場が使用できないこととなります。これにより、宝町キャンパスでの教職員・学生用の駐車場は六二九台分しか確保できない状態となります。

宝町キャンパスでは駐車場の確保については、これまで鋭意努力してきましたが、スペース的に限界に達している現状、

会報 120 号 (平成 14.1.17)

附属病院の新病棟竣工

附属病院長 河崎 一夫

当附属病院の本年の宿願であった病院の全面改築の最初の成果として、新病棟が竣工しました。病棟の建物の一新のみでなく、新病棟で使用する医療用装置も大金を投じて最高のものに整備されました。新病棟竣工記念式典は、森前総理大臣はじめ多くの先生方の御臨席を賜り、昨年九月七日(金)に盛大に挙行されました。竣工記念式典に際し、十全同窓会から多大の御支援をいただき、深く感謝申し上げます。

高台に聳える大きな新病棟(地上二〇階、地下一階、延べ面積四二四〇平方メートル)は、平面で見ると船型にそっくり、優雅に湾曲し、周りに威圧感を与えないよう工夫されています。その外壁面の色は、武家屋敷の土塼の色をイメージし、金沢の街にしっかりと溶け込んでいます。

新病棟は他国立大学病院から羨ましがられる程の素晴らしいです。国立大学病院では初めての免震構造は耐震構造よりも優れ、阪神淡路級の地震にも耐えます。万一の火災に備え、全病室に押しボタンで音に聞く警報装置があり、安全第一の設計です。全病室にウォッシュレットのトイレ付き、全ベッドにそれぞれテレビ・冷蔵庫付きです。個室率が大幅に高まり、全個室に外線電話付きです。夜間巡視の足音が響かないように、廊下は絨毯張りです。

新病棟内には一般の病室の他に、アイソトープ病室、高密度無菌治療室、薬剤部、集中治療部、院内学級などが整備されました。精神科病棟は別棟で二階建てで、開放的な広い屋外スペースがあります。

このように新病棟では最新の医療設備と最高の居住性の病室を備え、また新病棟の竣工を機に金沢大学がん研究所附属病院と統合して機能を一段と充実させ、大学病院ならではの高度先進医療を一層促進します。

先に十全同窓会会報の紙面を拝借して、当附属病院に飾る絵画などの御寄贈をお願い申し上げましたところ、多くの素晴らしい御寄贈を賜りました。十月二十日で五九点の多数に達しました。十全同窓会会員の先生方の御自身や御令室様の立派な御作品も多数いただきました。日展入選の醍醐の先生方からいただいたました。また本報の有名な画家の名画を十全同窓会会員の先生方の御持送で拝致しました。「母校の附属病院の患者様のお心が安らぐなら、こんなにうれしい



新病棟の威容 (後方から)



新病棟竣工記念式典におけるテープカット。左から、澤武がん研究所病院長、馬淵医学系研究科長、河崎病院長、森前総理大臣、林学長、小田副文部科学省文教施設部長、谷本文部科学省大学病院指導室長、水上事務局長

つて職員一同渾身の努力を尽くす覚悟でございますが、今後とも十全同窓会会員の先生方から患者様を是非御紹介賜りますよう格段の御支援を衷心よりお願い申し上げます。本年におきましても貴台様には益々御清祥であられますよう祈念申し上げます。

ことばではない」との御温情あふれるお言葉を添えて下さいました。患者様からも感謝のお言葉とともに、高さ七センチメートルもある見事な九谷焼の壺をいただきました。竣工記念式典の日には新病棟の一室にまとめて御覧いただきましたところ、「素敵な壺のよう」との反響でした。御礼の言葉もなく、深く感謝申し上げます。

病院の全面再開を完了するには、病棟の竣工の次に中央診療棟と外来棟の改築が不可欠です。しかし中央診療棟と外来棟の改築が予算化されたわけではありません。これを実現するには、その予算を獲得すべく具体的成果を挙げねばなりません。すなわち特徴ある高度先進医療の一層の促進と健全な収入の確保が求められます。これに向か

会報 132 号 (平成 18.1.23)

附属病院新中央診療棟オープン

病棟に続いて、この度、中央診療棟が完成し、十月一日から診療を開始しました。地上四階地下一階建て、延べ面積一七、九一〇㎡です。オープンに先立って、九月九日に完成記念式典が開催されました。中央診療棟玄関前、山本見文部科学省高等教育局大学病院支援室長、新保第一文部科学省文教施設部企画参事官、林勇二部長、中村信一病院担当理事、副学長と小泉病院長がテープカットを行いました。続いて出席者約百六十名が施設を見学しました。その後医学部記念館ではさやかなパーティを行いました。翌日は一般公開見学会が催されました。

中央診療棟の地下一階は総合診療部、放射線治療部門、一階は総合診療部、救急部、二階はレントゲン撮影室、内視鏡診療部門、血液透析室など、三階には血液、生化学など検査部門が集中配置されています。四階は十四室からなる手術部、病棟四階の集中治療部や術後管理部門と清潔な廊下で直結しました。また、手術部と三階の病理部は専用装置で直結し、術中迅速病理検査がより便利になりました。新しい金沢大学病院の「パリアフリーホスピタル」の理念が随所に生かされています。

手術室は一四室に増え、各室の広さも十分でスタッフの採り取りは上々です。また、日帰り手術を積極的に行うことができるようになり、大学病院にふさわしい高度先進医療を展開し、地域基幹病院としての役割を果たしていき

ます。さらに導入されたダ・ヴィンチロボットが、冠動脈バイパス手術や泌尿生殖器系の手術で活躍するでしょう。執刀医は内視鏡で患者の体内の三次元映像を見ながら、両手でアームを操作します。見学会では遠隔模擬操作をしてみました。が、素人でも出来るような簡便性を実感しました。

放射線部は二階の約半分を占めますが、患者さんの動線とスタッフの動線が分離され、双方の利便性がよくなりました。MRRの更新、移転は一年先延ばしになりましたが、新施設ではレントゲン撮影など画像診断は完全にフィルムレス化されました。画期的なことです。

救急部は一階で、従来の二階に比べ数倍のスペースに拡張され、設備も充実されました。重症の外傷や熱傷、中毒、心臓停止、重度の意識障害など三次救急医療を中心とした展開が期待されます。救命救急センターを目指し、救急医療の指導医、専門医養成施設として研修医の教育に貢献したいと思っております。病棟連携、病診連携を通して十全同窓会の先生方の絶大なご支援をお願いいたします。



新しい手術室の見学会でダ・ヴィンチロボットを遠隔模擬操作してみよう



救急部入口からみた新中央診療棟



附属病院の全景：高層の船型の病棟の手前の白くみえる真四角の建物が新中央診療棟

十二月起

(附属病院長 小泉 晶一 平成十七年

会報 133 号 (平成 18.6.2)

仮設立体駐車場完成

附属病院患者・来客者用駐車スペースを拡充し、病院再開発・総合研究棟改修事業に伴う職員用駐車スペースの狭隘化を回避するため、金沢大学と(財)済美会の契約の下、医学部グラウンド上に建設が進められていた仮設立体駐車場の完成した。同駐車場建設は、平成十六年十一月に検討委員会(委員長、医学系研究科長)による立案開始、以後設計、競争入札、埋蔵文化財調査、地鎮祭等を経て、平成十七年十二月着工、平成十八年四月一日供用開始と合わせて迅速・上首尾に進行した。去る三月三十一日、林金沢大学



長、波多野済美会理事長は多数の臨席を得て、立体駐車場の竣工式が盛大に挙行された。

(山本 博 記)

会報 133 号 (平成 18.6.2)

新解剖棟落成式

新解剖棟が旧解剖棟の南側に完成し、オープンに先立って、三月三十一日に落成式が執り行われました。新解剖棟の玄関において、山本博医学系研究科長、古川保医学部長、竹田亮祐十全同窓会長、佐藤保十全同窓会副会長および吉本谷博宝町キャンパス再開発検討委員会委員がテープカットを行い、続いて出席者約二十人が施設を見学しました。

新解剖棟は二階建てで、旧解剖棟に併設されています。新解剖棟には解剖実習室と法医学解剖室の他に第四講義室も配置され、多様な利用が期待されています。新解剖棟の特徴は、従来の解剖棟に比べ、化学物質の除去に優れた最新の換気設備を有している点です。これにより化



講義室



解剖実習室

学物質過敏症にも対応した施設となっています。また、解剖実習室内はとても明るく清潔であり、学生が実習を行いやすい環境であることは言うまでもありません。すでに、四月から新しい実習室を使用して解剖学実習が開始されています。使用している学生の感想は、一様に実習室の環境の良さを挙げます。また、旧解剖棟はリフォームを施して講義室や標本庫に利用される予定です。

(文責 若山友彦)

会報 133 号 (平成 18.6.2)

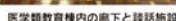
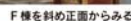
十全講堂の装い新たに

宝町地区のBCE(Private Financial Initiative)事業の一貫として行われていた十全講堂の改修工事が終了し、平成十八年三月三十一日、新装なった十全講堂のお披露目が行われました。白亜の殿堂と称えられた外観の雰囲気はそのままだが、一階と二階ともに改装され、特に、一階はバリアフリーとなっており、玄関にある階段の脇に設置されたスロープが目を見せます。また、一階にある大講堂の椅子はすべてシスター形式の椅子に替わり、長時間の使用でも疲れない工夫がされました。十全講堂は利用者にやさしい細部にも気配りが行き届いた施設へと生まれ変わりました。建設当時の十全同窓会会報によれば、十全講堂は三種類の座席所設立から数えた本学医学部の百周年記念事業の一つとして会員の拠金によって建設され、昭和三十八年七月七日に竣工式が挙行されています。十全講堂がリニューアルされたことは、平成二十四年に迎える百五十周年に向けて大いに弾みがつくことと思われています。

(若山 友彦 記)



金沢市立宝町総合研究棟改修施設等事業。以下、宝町キャンパス内において、角間日園へ移転後の田舎学部の教育・研究施設を有効に活用し、また、老朽・故障の著しい大学医院図書研究棟の既存施設と共に、修繕整備を行うことにより、生命科学科の高度教育・研究拠点を構築するものとして文部科学省に計画に選定され、平成七年度から始めた「F1事業」は、A棟（旧製薬化学実験研究棟）、B棟（旧薬学実験研究棟）、十全講堂改修及びG棟（新解調棟）教育研究棟本棟の改修が完了し、平成十八年度末にはE棟（旧北棟）の改修が完了し、平成十九年十一月末に教育棟、旧中興棟、及びF棟（旧南棟）の改修工事が完了しました。国はその維持配置を行い、写真は建物の内外表である。今後は、施設等の運用管理を示し、本事業の事業期間外は、平成三十三年までの約十四年間とされている。〔編集委員 中村 裕之 記〕

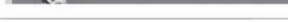


1. 改修建物

2. 制業建物

--	--	--	--

この度、平蔵の顔へにあたる新外來診療棟が、平成十八年十一月から二年の歳月をかけて完成しました。これで二年間にわたって進められてきた新・金沢大学病院棟の建築が病棟、中央診療棟に続き全て完成したことになります。振り返ってみますと二十年以上も前に、一大プロジェクトとして「金沢城内にある金沢学を角間に移転しよう」という方針が掲げられました時、当時の教授会では「大附属病院だけは金沢市内に留まろう」と決議された、これに従って、平成七年に新・金沢大学附属病院の基本構想案が決まり、平成十年から工事が開始、まず新病棟が平成十三年に完成し、次い



れたのかしられています、が覚え難いのか。病院中央にいて盛大に行なわれるものか、病院外において盛大に行なわれるものか。来賓として徳永保・文部科学省高等教育大臣、森喜朗・衆議院議員（元内閣総理大臣）、谷正憲・石川県知事、山田保・金沢市長、飛田秀一・金大附属経済系・産業界・医師会・農薬関係者の代表者、保健理事長は、県の行政責任者、金大附属病院長連病院長など、本学内からは七十名、元病院長も、教授他、計約二百七十名の関係者をお招きし、新外米診療棟や、古い現臨床（医局）研究棟を視察していただきました。また本学内の方の臨床、基礎の教師ほか、多くの先生方、看護師他にも出席していただき誠にありがとうございました。

記念式典では、病院としての式辞の後、学長よりご挨拶、続いて「来賓の方々

係属の方々に由る後、米玉並びに本院院
内から御参りを賜つた。金色のくす玉が割れ
て瞬間、金色の虹、紙吹雪がキラキラと
舞ひ降りてくる。新秋雪がスローロ
ーの医療を「最新設備のある中で、最高の
医療を」の一歩前進、現われぬ光景は、病
院の明るい前途を約束しているような鮮
やかな絵巻を与えたことと思ふ。

引き続き、さながら観衆視聴会を催し、
参加者同志との親交を温めました。次々
と登場である新・臨床研究科の早期行進
への働きかけも水面下につくりと行なわ
れていきました。



に見えます。このように全体を把握しやすいという点で、一階の診療棟と併せて、我々が三つとして患者さんにとって、移動しやすい利便性、大いに向上したといえます。

新外來診療棟も、少し詳しく述べますと、地上四階、地下一階建てで、延床面積が一万八千七百九十九平方メートルとなっています。地階には医学診療科や一階は、臨床試験センターなど、二階は外科系部門、三階は内科系部門、四階は小児科、皮膚科、皮膚科は全体的に小児科の診療棟が配置されています。金庫予約制としたことで各科がスペースを譲り合いながら有効に使っていくことになります。なお四階には病院執行部、事務系部門、看護部が配置してあります。また、病院側からの強いお願いにより、「財・清美ホール」の断面による目的会議室（宝ホール）の大人取寄をこの四階に寄附していただき

大きい役
立ってくれ
るものと期
待していま
す。全体と
してもとも
と三階まで
の許可施設
であったの
をいろいろ
と折衝して
採出でき
た四階建てです。で、寶沢はいえませんが、
手狭な感じ、不都合な点などに対する微
修正にしばらくは時間がかかることと思い



医学図書館竣工式・記念祝賀会 —この度「医学類」の顔にあたる 新医学図書館が完成しました—

金沢大学医学図書館は、大正十二年に作られた旧金沢医科大学附属図書館が前身です。その後、昭和二十四年、金沢大学の発足に伴い金沢大学附属図書館の医学部図書となりました。

今回改修が行われた旧医学図書館は、昭和四十四年に竣工した建物で、金沢大学の総合移転や再開発が進む中、最も古い建物のひとつとして取り残されてしまいがちで、壁にひび割れが走るなど老朽化が著しい状態でした。この状態を打開するため、附属図書館では平成二十年以降、増設を要望してきましたが、このたび、その念願がかない、平成二十五年三月十四日、新医学図書館が開館しました。これで平成元年に始まる金沢大学の「総合移転」と「総合開発」の最後を飾る一ページにふさわしい建物が完成したわけです。

この日、新医学図書館玄関で、笠原隆文部科学省大臣官房文教施設企画課計画課整備計画室長、佐藤保金沢大学医学部十全同窓会会長、中村信一学長、櫻井勝横田崇医学図書館長によるテープカットが行われた後、竣工式を二階十全記念スタジアムで開催しました。式には約九〇名の参加者がありました。

式では、新医学図書館長の式辞、中村学長の挨拶に続いて、文部科学省の笠原文部科学省大臣官房文教施設企画課整備計画室長、佐藤保金沢大学医学部十全同窓会会長、中村信一学長、櫻井勝横田崇医学図書館長によるテープカットが行われた後、竣工式を二階十全記念スタジアムで開催しました。式には約九〇名の参加者がありました。

原室長、佐藤十全同窓会会長から祝辞を賜りました。その後、横田医学図書館長が新医学図書館の概要説明を行った後、参加者

に新医学図書館を見学していただきました。引き続き、附属病院四階ホールに移動し、記念祝賀会を盛大に行い、長澤公洋文部科学省研究振興情報課学術基盤整備室長等からお祝いの言葉をいただきました。

新医学図書館の床面積は、改修前後で比べると一八四五㎡から一三〇五㎡と約一・七倍、閲覧席数も百二十九席から三百三十五席と約一・六倍に増加しました。今回改修にあつたのは、以前は非常に天井の低い、積層式四階だった書庫が、ブックラウンジと呼ばれる吹き抜けのスペースに生まれ変わった点です。また、隣のエ棟とは渡り廊下でつながり、学生にとっては図書館がより近くなったことになりました。

今回の増設にあたり、次のようなゾーニングを行いました。

一階は、静かに学習できる「静」の空間、二階は、共同学習できる「話」の空間、三階の書庫と二階の十全記念図書室を「知」を継承する空間として、一階ブックラウンジは、人が集う「集」の空間といたしました。

その中で特に特徴的なのは二階です。近年の学習行動の変化に対応した施設を

備えました。フロアのはば全体をグループで討論しながら学習できるスペースとし、オープンスタジアムと名付けました。このような空間で共同学習することにより、学生たちが、伝える、聞く、まとめるといったコミュニケーション能力を向上といったことを期待しています。また、利用者用パソコンが二十四台あり、情報検索やレポート作成などに利用できます。同じフロアにある十全記念スタジアムは、講習会などを開催できるセミナー

ルームとして整備しました。イベントがない場合は、自由に使える部屋として開放しています。この部屋は貴重資料室に「十全記念」と冠していただきました。これは、増設にあたり金沢大学医学部十全同窓会から多大なご寄付をいただいたことを記念するためです。

その他、予約して使うグループ学習用の部屋、グループスタジアムが四部屋あります。それぞれテーブル及び椅子の色が違った部屋になっています。廊下側の壁面はガラス張りになって、学生に大いに利用してもらえたら、喜ばしいことです。そのことにより、医学図書館の増設に関わった多くの人の苦勞が報われることになりました。

今後は、さらに図書館機能の充実をはかっています。このように、皆様のご支援をいただいた力強いご支援をお願い申し上げます。

(横田 崇 記)

金大病院CPDセンター完成記念式典の報告

金大病院CPDセンター完成記念式典が平成二十五年四月二十七日(土)、谷本正憲石川県知事をはじめ、関係者約五百十人の参加のもとに金沢大学附属病院の同センターで盛大に行われました。式典では、富田勝郎院長が「四年間の長き月日をかけて念願のCPDセンターが完成し、本日ここに多くの関係者の皆様方とともに記念式典を迎えたことへの感謝の言葉をCPDセンター」

で結んで、「石川の地域医療を考えた。能登北部四病院の院長や首長さんにも参加頂いていた珠洲会場からは、能登北部にとって医師確保・地域医療の確保は最も重要な課題であり、CPDセンターの開設によって能登北部の病院に安心して勤務してもらえる環境が整備されたことへの感謝の言葉をCPDセンター」

と、今後への期待等が述べられていました。引き続き、

一理事長から、今後も継続して金大病院を支援していく旨の心温まるお言葉と祝辞をいただきました。博識で親しみやすい金沢大学関係者代表として上田 博先生に乾杯の音頭をとっていただきました。そして、祝賀の最後に、CPDセンター長の中嶋で閉会となりました。金大病院CPDセンター完成記念行事は成功裏に幕を閉じました。

CPDセンターのCPDとは、Continuing Development(継続的な専門職)の略であり、職業人に必要な専門教育と能力開発を継続的に行うことを意味します。つまり、APPや専門能力を向上させるためのシミュレーション、生涯教育を目的とした施設であります。同窓会会員の皆様方に大いに活用していただければ幸いです。

(CPDセンター長 太田 哲生 記)



会報 158 号 (平成 26.10.2)

臨床研究棟 (C棟) 竣工記念式典

医学系臨床研究棟 (C棟) は、平成二十三年三月の第一期工事着工から四年を経て本年三月に第二期工事の竣工を迎えました。竣工記念式典が五月十六日、附属病院宝ホールにて開催され、関係者約三百三十人が新たな拠点誕生を祝いました。

研究棟は七階建て、延床面積一万四千四百二十六平方メートルで、診療棟の東側に建設され連絡通路でつながっています。この臨床研究棟の竣工により、再開発のための新しい建設は終わり、約三十年に渡る宝町・鶴岡地区再開発・金沢大学総合移転事業計画は完了しました。あとは古い建物の撤去が行われ、正面玄関や、プロムナードと駐車場の整備などが残るだけとなりました。

式典では、医学系長の武蔵の後、山崎光悦学長のご挨拶、中村信一前学長のご挨拶に続き、森喜朗元内閣総理大臣のご祝辞をいただきました。城内からの金沢大学の移転のお話からはじまり、この臨床研究棟の竣工にいたるまでの味わい深い内容で、参加者の多くが感銘を受けました。いかに多くの方のご協力をいただいて、今日を迎えることができたのかと、長年にわたってご貢献をいただきました。



C 棟建物

文部科学省
文教施設
画部長 山野之義
金沢市長より心あたままるご祝辞をいただきました。式典終了後は、関係者らが最新の機器が整備されている臨床研究棟の様子を見学しました。そして、今回の工事費用の一部に充てられた『渡辺基金』の寄附者、故 渡辺治先生の高志を顕彰して設置されたレリーフ前で記念撮影を行い、改めて完成の喜びをかみめました。

経済の低迷と少子高齢化などから国力の低下が問題となっています。それを突破する方法のひとつが大学力の強化です。国は大学に改革を促す施策を次々に打ち出しています。国内の大学は改革を競いながら施設の充実を遂げようとしています。こうしたなかにあつて、本学の再開発では素晴らしい臨床研究棟が認められました。このことは、これまでの諸先輩の皆様が優れた教育と研究を行ってこられたことの証であると思います。新しい充実した施設で研究をさせていただくことができますことに、心より感謝申し上げます。



記念式典

完成した研究棟を大いに活用させていただき、教育と研究を、屋ともにより一層充実させ、臨床研究を推進していきたいと思っております。そして、金沢大学憲章の基本理念「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」に従い、世界に通ずる臨床研究の中核拠点に成長していきたいと思っております。

(医学系長 金子 周一 記)

会報 161 号 (平成 27.9.28)

ベールをめぐりとしていたメインプロムナードに 関係する二三の歴史について

医学部創立五十周年記念事業(準備・実行委員長 金子周一・井筒尚一・山本健・多久和陽歴代医学部長)と平成二十六年に開始された国・金沢大学・金沢市共同施設整備事業の順調な推進により、メインプロムナードが徐々にその偉容を顕しつづめています。

明治四十五年の校舎落成以来、一世紀余に亘り、本校の人物往来を見守つて来た正門が、十全講堂を真正面に望む位置に移動する。キャンパスに入るや、右手に医学館第一期生像と高安右人像が現れ、正面にメインプロムナードがひろがる。(3頁多久和陽歴代医学部長による記事と写真参照のこと)

メインプロムナードの左右に連なる樹々は、昭和五十九年に医学部環境整備委員会(故太田五六委員長)によって選定され、昭和六十年に故岡本肇名誉教授のご篤志によって植樹された。初夏から秋にかけては豊かな緑、晩秋には鮮やかな紅葉を左右するいは上



方に見やりながらプロムナードを歩むうち講堂に達しよう。

欄干に挟まれるエリアは通常歩道として使用されるので、昭和六十年に故藤田幸雄先生のご篤志で設けられた赤レンガのバースメントはその歴史的使命をいえるが、岡本先生と藤田先生のご功績を讃えたブロンズ製パネル(写真)は、欄干に面する医学部教育棟外壁に残される。パネルには「欄干歩道 昭和六十年 寄金」の文字が刻されている。揮毫者の氏名は記されていないが、筆跡からすると、当時医学部長であった故西田尚紀先生の揮毫ではないかと推察される。

写真 「欄干歩道」銅製パネル

キャンパス整備計画の中、メインプロムナード建設は、医学部創立五十周年記念事業の最後を飾る事業として行われており、記念事業費の拠出を主たる財源としている。ご篤志をお寄せいただいた十全同窓会の皆さまと教職員各位に改めて深甚の謝意を表する次第です。

(編集委員 山本 博 記)





